

第 24 回 南海トラフ沿いの地震に関する評価検討会
第 402 回 地震防災対策強化地域判定会

気 象 庁 資 料



令和元年 10 月 7 日

本資料は、国立研究開発法人防災科学技術研究所、北海道大学、弘前大学、東北大学、東京大学、名古屋大学、京都大学、高知大学、九州大学、鹿児島大学、国立研究開発法人産業技術総合研究所、国土地理院、国立研究開発法人海洋研究開発機構、公益財団法人地震予知総合研究振興会、青森県、東京都、静岡県、神奈川県温泉地学研究所及び気象庁のデータを用いて作成しています。また、2016 年熊本地震合同観測グループのオンライン臨時観測点（河原、熊野座）、米国大学間地震学研究連合（IRIS）の観測点（台北、玉峰、寧安橋、玉里、台東）のデータを用いて作成しています。

以下の資料は暫定であり、後日の調査で変更されることがあります。

令和元年9月1日～令和元年9月30日の主な地震活動

○南海トラフ巨大地震の想定震源域およびその周辺の地震活動：

【最大震度3以上を観測した地震もしくはM3.5以上の地震及びその他の主な地震】

月/日	時:分	震央地名	深さ (km)	M	最大 震度	発生場所
9/5	09:57	和歌山県南方沖	29	4.1	2	フィリピン海プレート内部で発生したと考えられる
9/8	02:24	日向灘	34	3.8	2	フィリピン海プレート内部で発生したと考えられる
9/16	00:57	日向灘	30	3.6	2	フィリピン海プレート内部
9/28	01:13	日向灘	31	3.6	1	フィリピン海プレート内部で発生したと考えられる

※震源の深さは、精度がやや劣るものは表記していない。

※太平洋プレートの沈み込みに伴う震源が深い地震は除く

○深部低周波地震（微動）活動期間

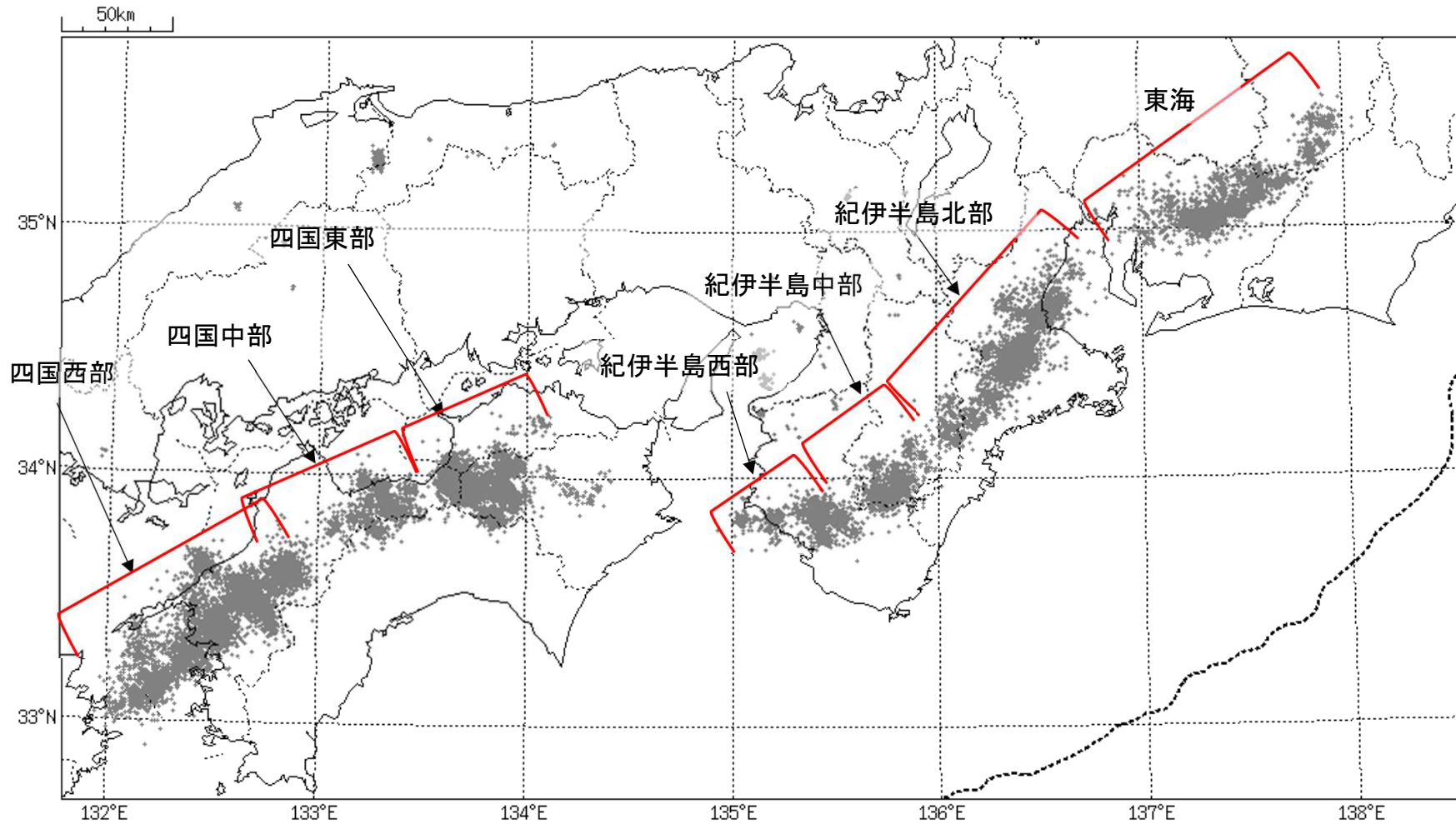
四国	紀伊半島	東海
<p>■四国東部</p> <p>9月12日～20日・・・(2)</p> <p>9月26日</p> <p>9月29日</p> <p>■四国中部</p> <p>9月6日</p> <p>9月15日～16日</p> <p>9月19日</p> <p>9月21日</p> <p>■四国西部</p> <p>8月31日～9月6日</p> <p>9月10日～11日</p> <p>9月15日</p> <p>9月17日</p> <p>9月21日</p> <p>9月25日～(継続中)</p>	<p>■紀伊半島北部</p> <p>8月31日～9月1日</p> <p>9月15日</p> <p>9月21日～22日</p> <p>9月24日～26日</p> <p>9月30日～(継続中)</p> <p>■紀伊半島中部</p> <p>(特段の活動はなかった)</p> <p>■紀伊半島西部</p> <p>8月29日～9月1日</p> <p>9月5日～8日・・・(1)</p> <p>9月17日</p> <p>9月23日</p> <p>9月25日</p>	<p>9月4日～6日</p> <p>9月29日～(継続中)</p>

※深部低周波地震（微動）活動は、気象庁一元化震源を用い、地域ごとの一連の活動（継続日数2日以上または活動日数1日の場合で複数個検知したもの）について、活動した場所ごとに記載している。

※ひずみ変化と同期して観測された深部低周波地震（微動）活動を**赤字**で示す。

※上の表中（1）（2）を付した活動は、今期間、主な深部低周波地震（微動）活動として取り上げたものの。

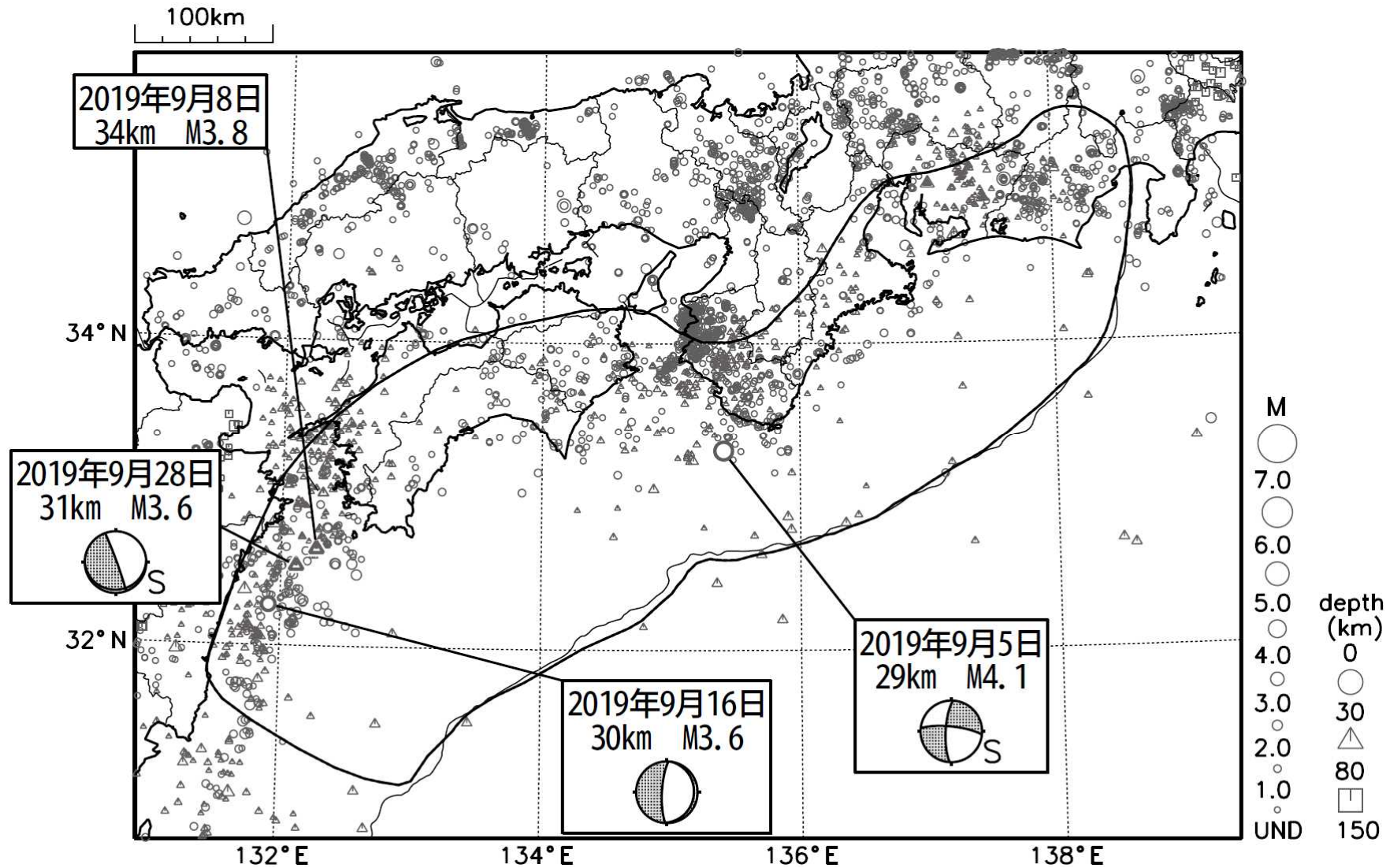
概況に記載している深部低周波地震(微動)の活動の場所



領域はObara(2010)を参考に作成。

出典 : Obara, K. (2010), Phenomenology of deep slow earthquake family in southwest Japan: Spatiotemporal characteristics and segmentation, *J. Geophys. Res.*, 115, B00A25, doi:10.1029/2008JB006048.

南海トラフ沿いとその周辺の広域地震活動(2019年9月1日~2019年9月30日)

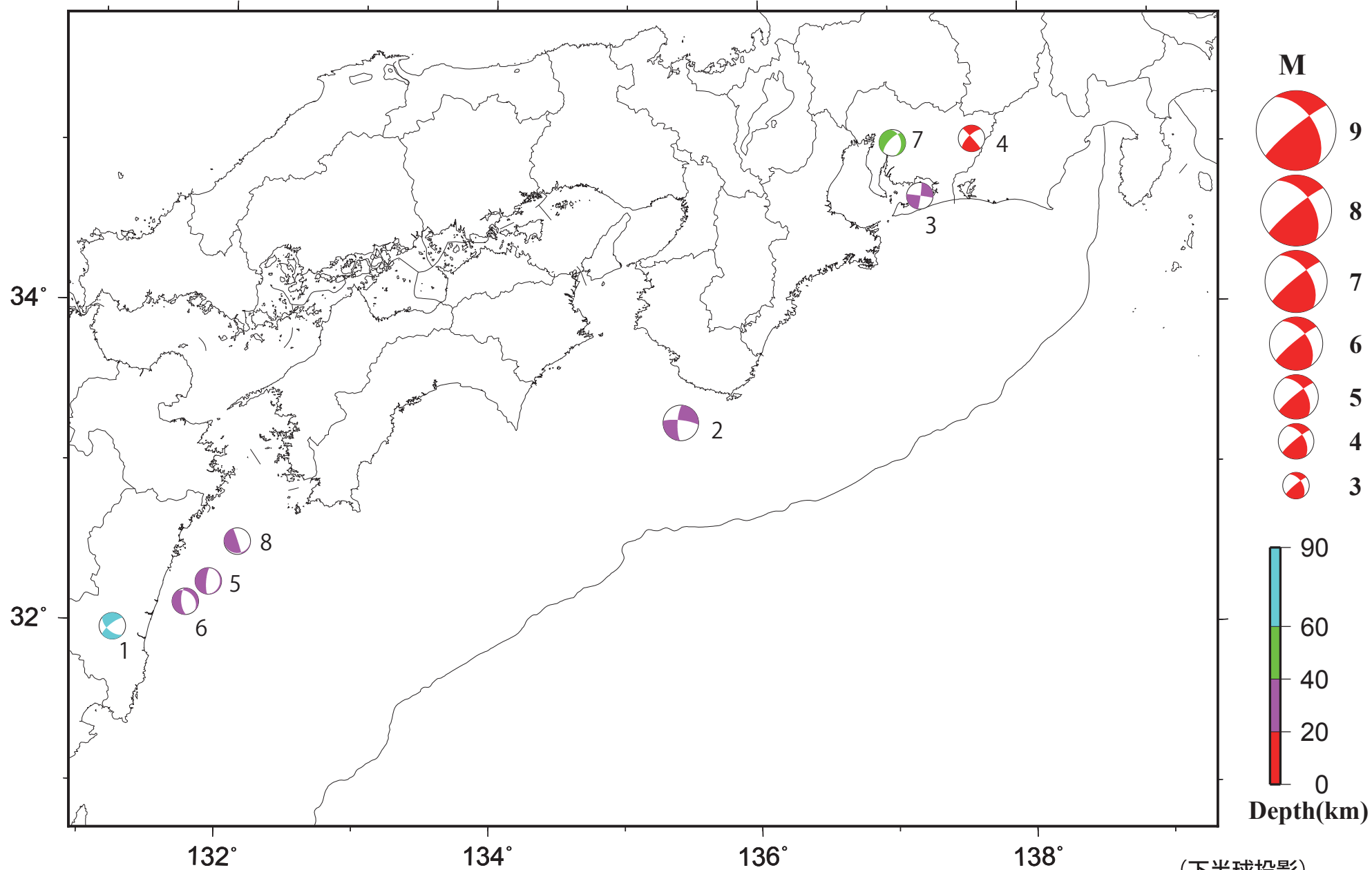


- ・図中の吹き出しは、南海トラフ巨大地震の想定震源域とその周辺で最大震度3以上を観測した地震もしくはM3.5以上の地震、それ以外の陸域M5.0以上・海域M6.0以上とその他の主な地震。
- ・震源の深さは、精度がやや劣るものは表記していない。
- ・発震機構解の横に「S」の表記があるものは、精度がやや劣るものである。

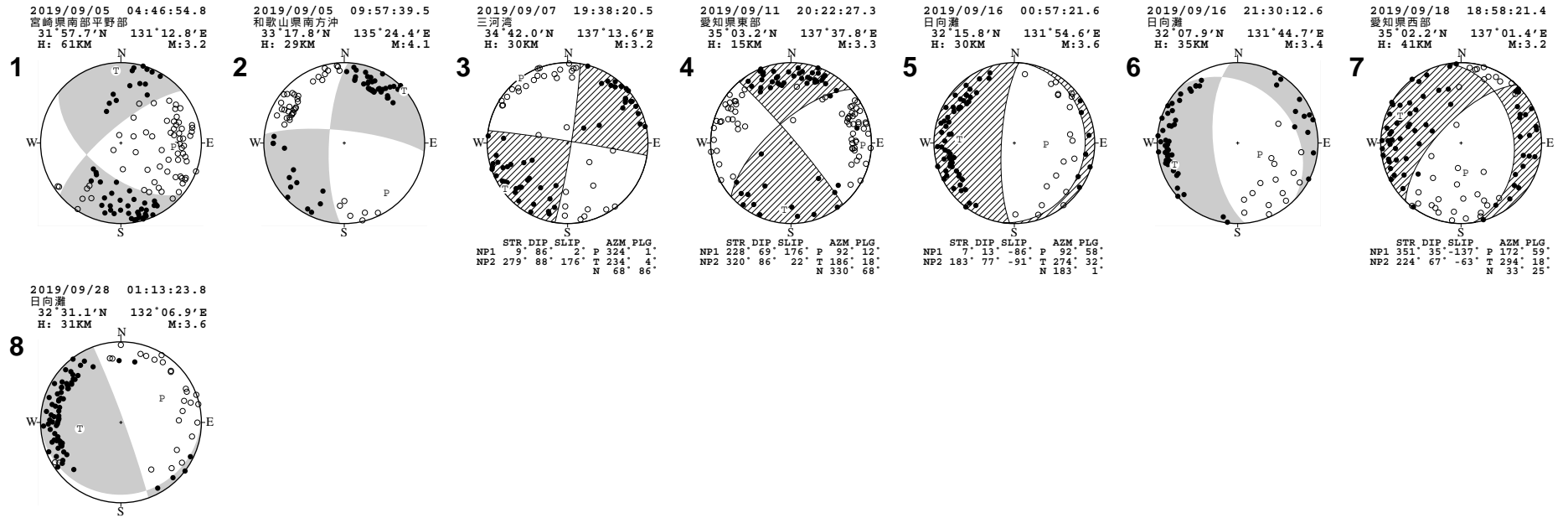
気象庁作成

南海トラフ沿いとその周辺の発震機構解

Period:2019/09/01 00:00—2019/09/30 24:00



南海トラフ沿いとその周辺の発震機構解 (2)

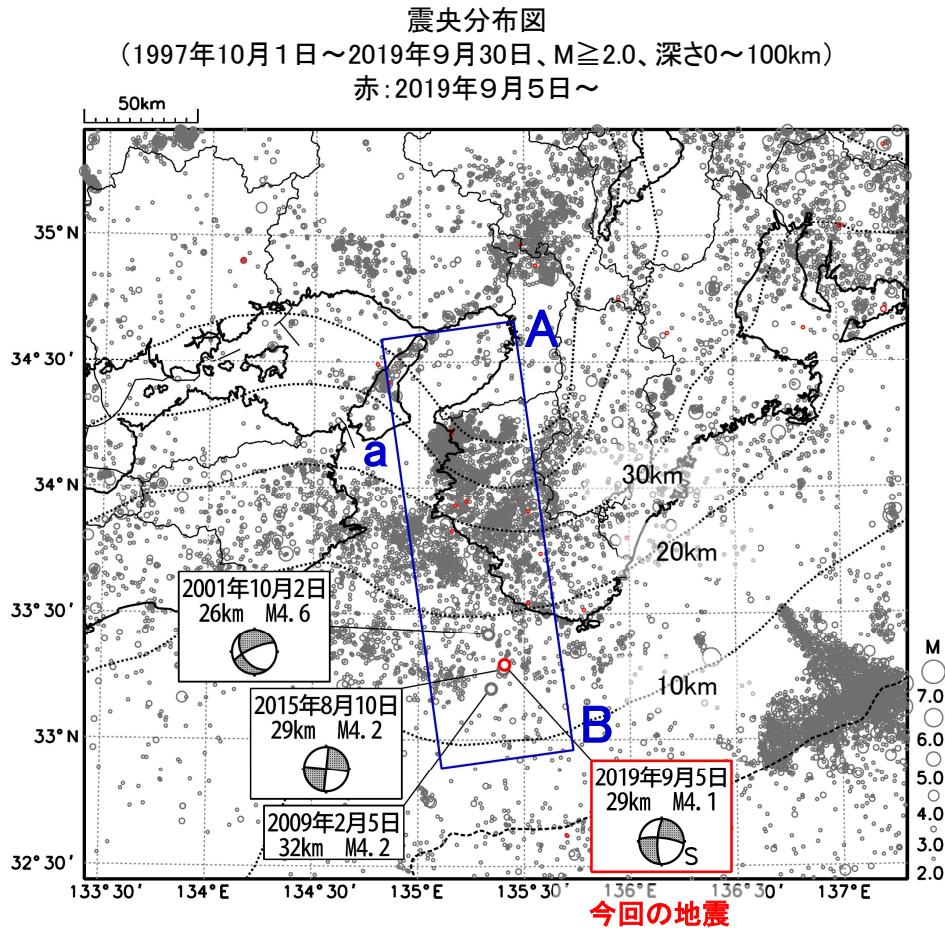


(下半球投影)
 [気象庁作成]

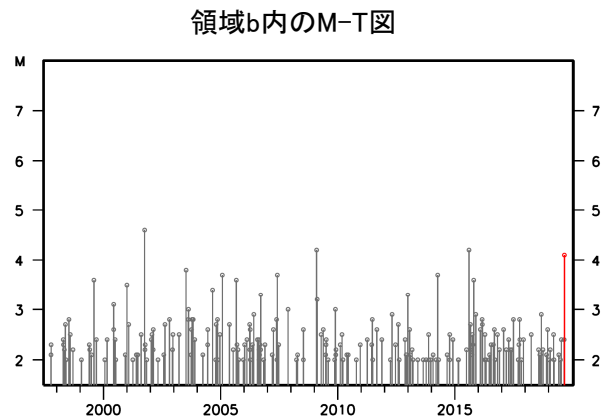
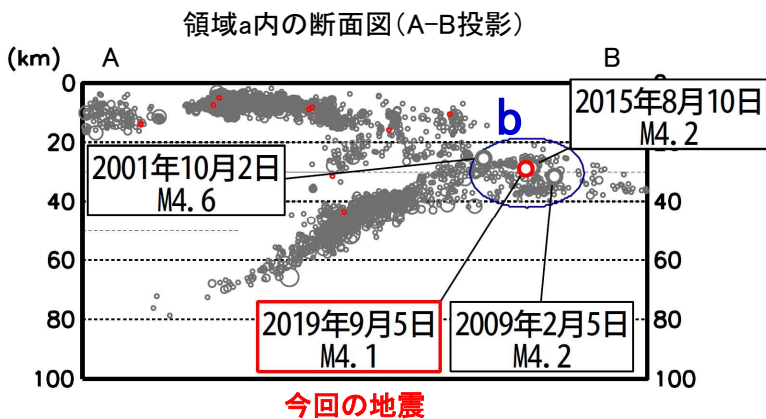
9月5日 和歌山県南方沖の地震

9月5日09時57分に、和歌山県南方沖の深さ29kmでM4.1の地震(最大震度2)が発生した。この地震は発震機構(参考解)が北東-南西方向に張力軸を持つ横ずれ断層型で、フィリピン海プレート内部で発生したと考えられる。

1997年10月以降の活動をみると、今回の地震の震源付近(領域b内)では、M4.0以上の地震が3回(2001年10月2日にM4.6の地震(最大震度2)、2009年2月5日にM4.2の地震(最大震度2)、2015年8月10日にM4.2の地震(最大震度2))発生している。



点線は、Hirose et al.(2008)、Baba et al.(2002)によるフィリピン海プレート上面の深さを示す。

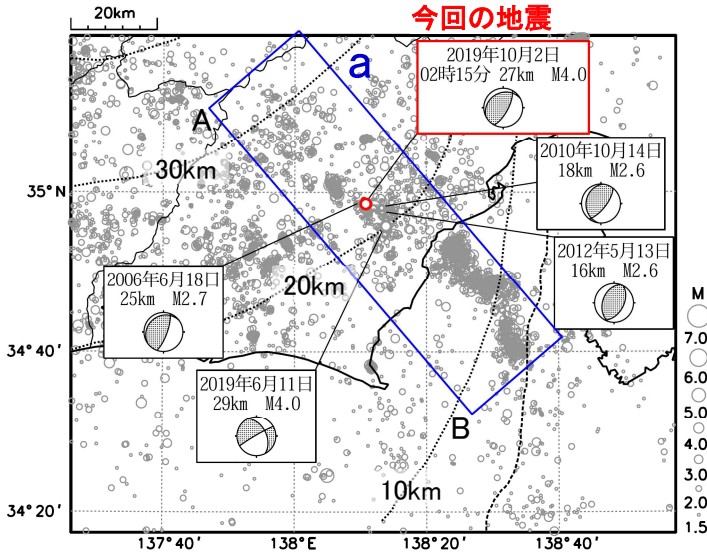


10月2日 静岡県中部の地震

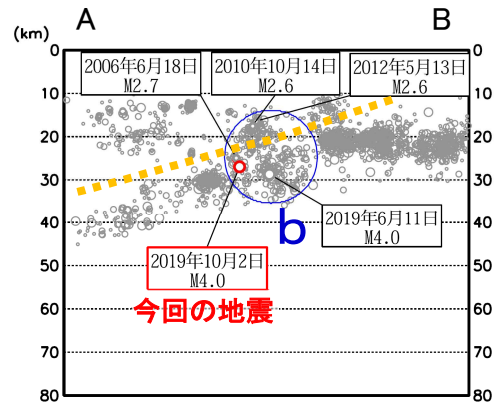
10月2日02時15分に、静岡県中部でM4.0の地震(深さ27km、最大震度2)が発生した。震源の深さから、フィリピン海プレート内部で発生したと考えられる。この地震は発震機構が北西-南東方向に圧力軸を持つ逆断層型である。1997年10月以降の活動をみると、今回の地震の震源付近(領域b内)は、定常的に地震活動がみられ、2019年6月11日にはM4.0の地震(最大震度2)が発生した。

震央分布図

(1997年10月1日~2019年10月2日、M \geq 1.5、深さ0~80km)
2019年10月2日の地震を赤く表示

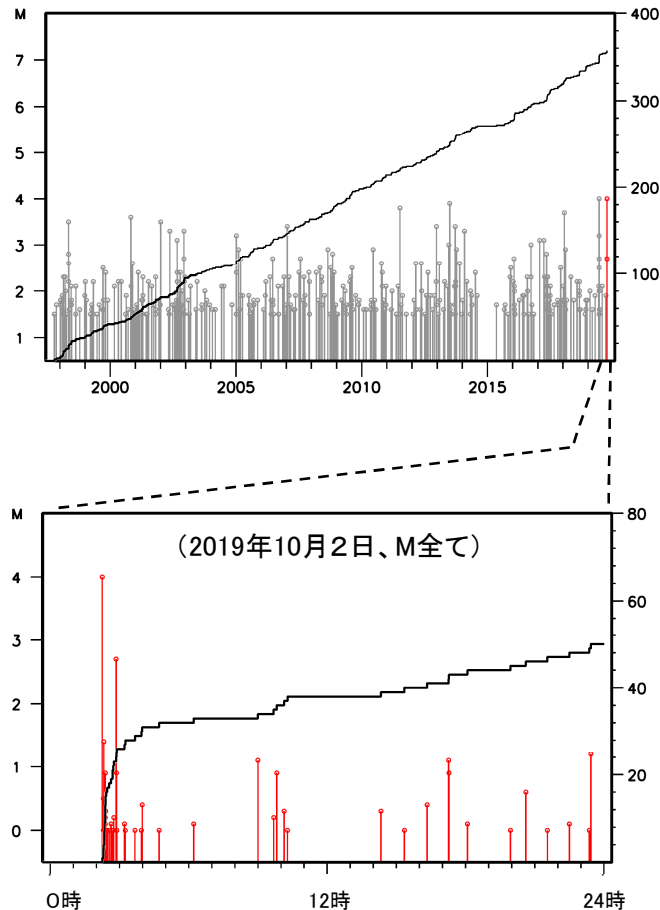


領域a内の断面図(A-B投影)



※震央分布図中と断面図中の点線は、Hirose et al.(2008)、Baba et al.(2002)によるフィリピン海プレート上面の深さを示す。

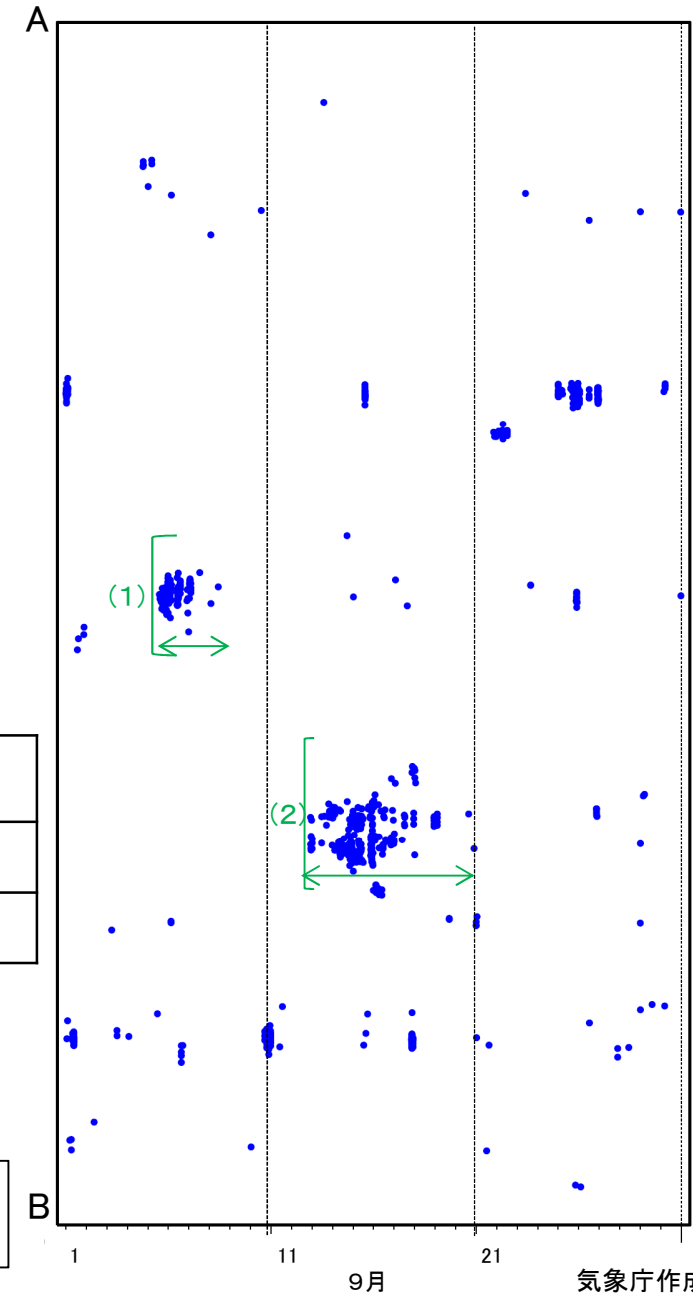
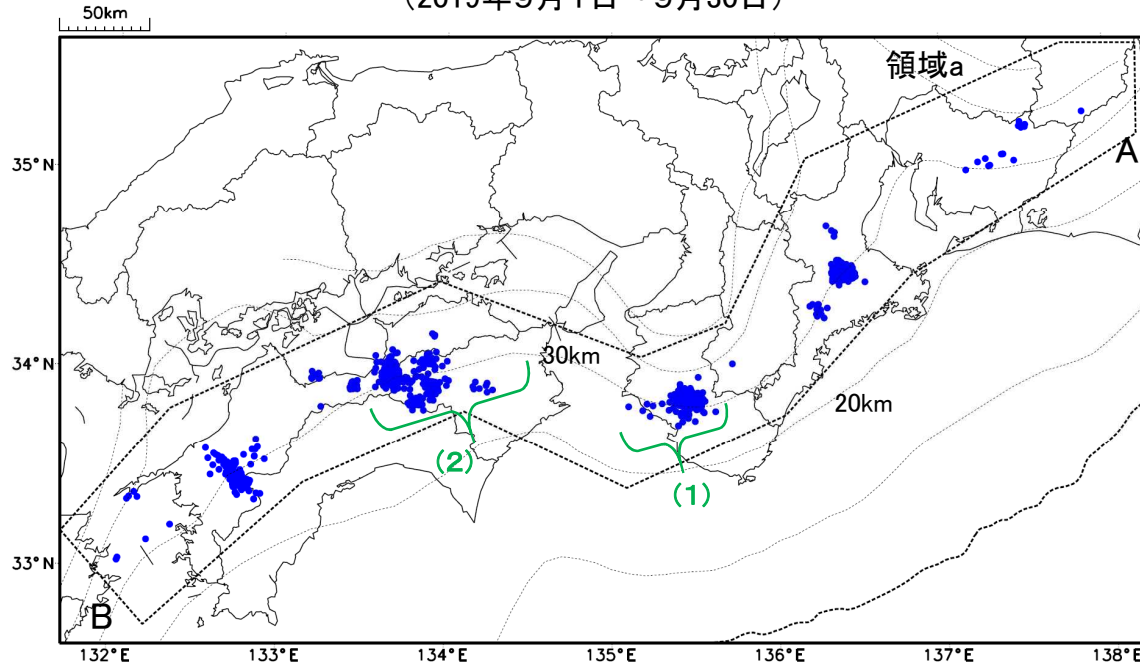
領域b内のM-T図及び回数積算図



深部低周波地震(微動)活動と短期的ゆっくりすべりの全体概要

深部低周波地震(微動)の震央分布図と短期的ゆっくりすべりの断層モデル
(2019年9月1日~9月30日)

領域a(点線矩形)内の深部低周波地震(微動)の時空間分布図(A-B投影)



主な深部低周波地震(微動)活動と短期的ゆっくりすべり

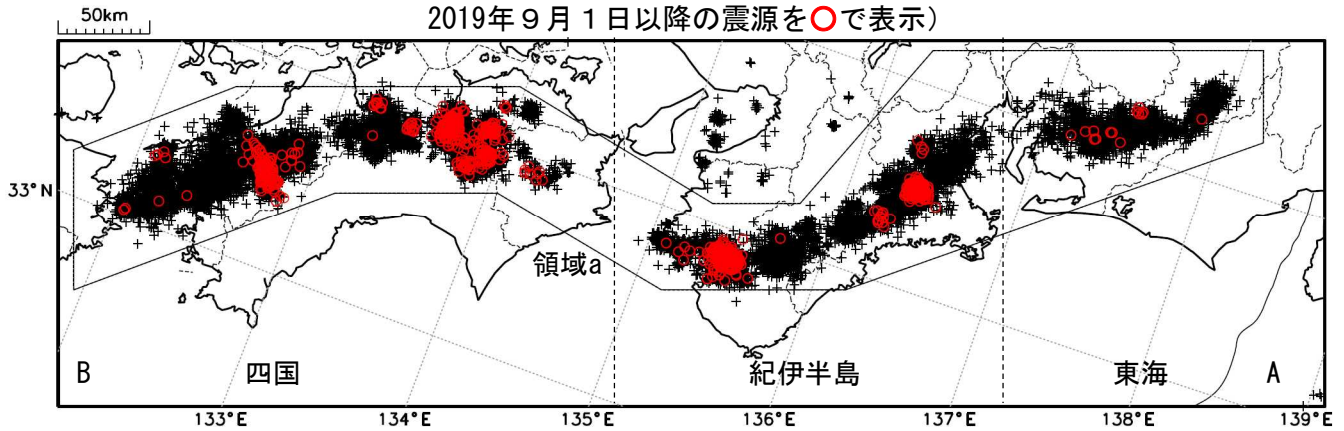
活動場所		深部低周波地震(微動)活動の活動の期間	短期的ゆっくりすべりの期間と規模
(1)	紀伊半島西部	9月5日~9月8日	(精度良く解析できない)
(2)	四国東部	9月12日~9月20日	(精度良く解析できない)

●: 深部低周波地震(微動)の震央(気象庁の解析結果を示す)
 □: 短期的ゆっくりすべりの断層モデル(気象庁の解析結果を示す)
 点線は、Hirose et al.(2008)、Baba et al.(2002)によるフィリピン海プレート上面の深さ(10kmごとの等深線)を示す。

深部低周波地震（微動）活動（2009年10月1日～2019年9月30日）

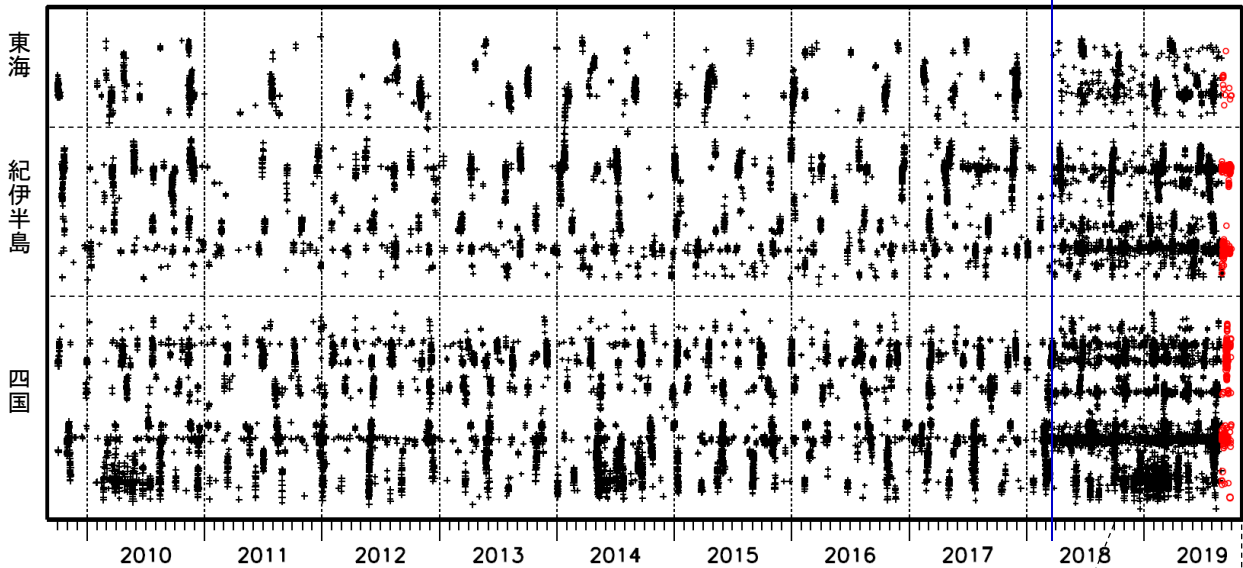
深部低周波地震（微動）は、「短期的ゆっくりすべり」に密接に関連する現象とみられており、プレート境界の状態の変化を監視するために、その活動を監視している。

震央分布図（2009年10月1日～2019年9月30日：過去10年間
2019年9月1日以降の震源を○で表示）

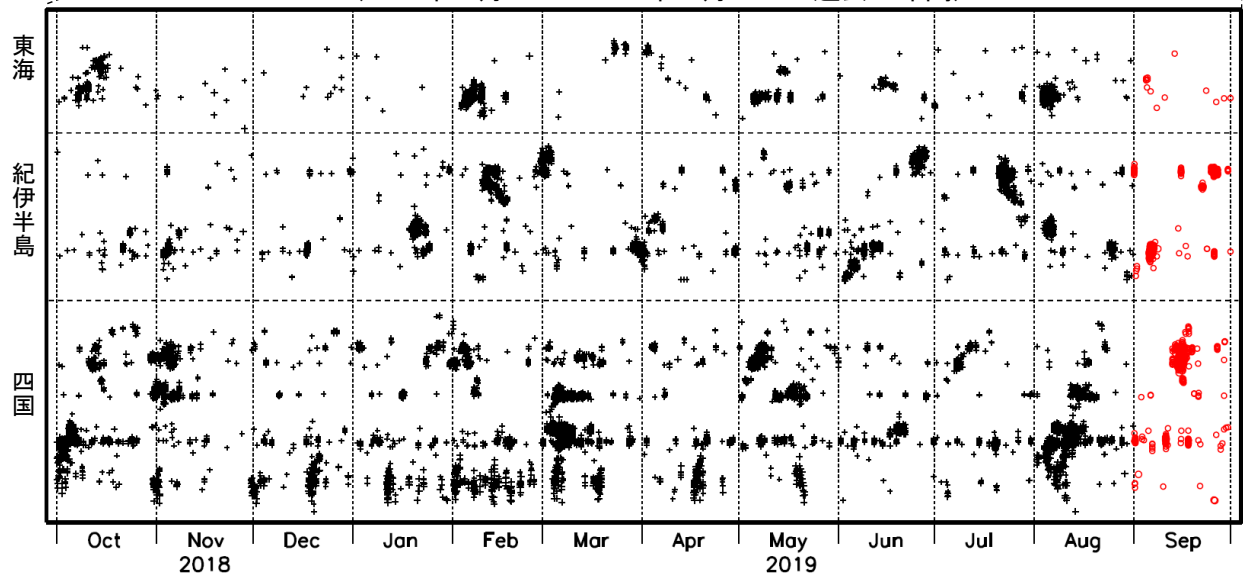


上図領域a内の時空間分布図（A-B投影）

※2018年3月22日



（2018年10月1日～2019年9月30日：過去1年間）

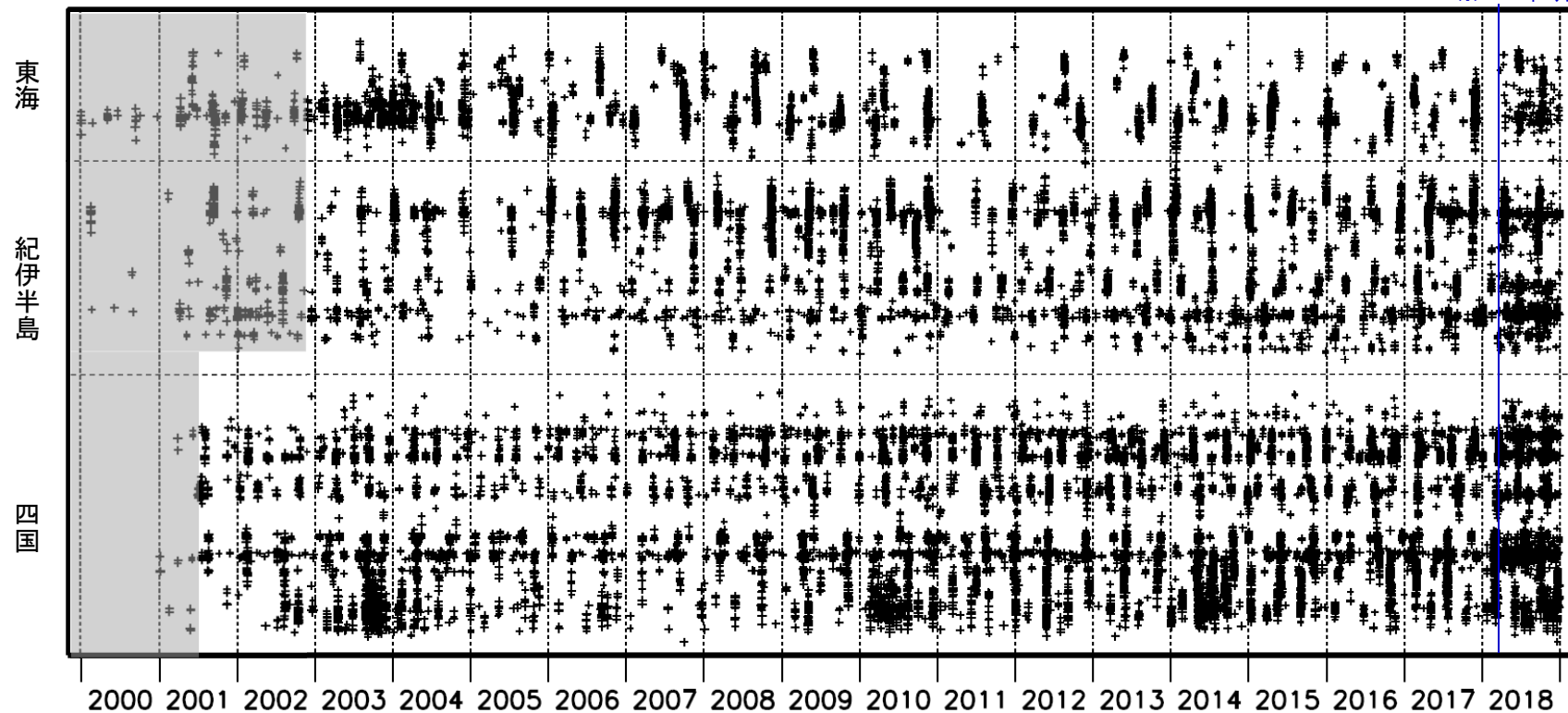
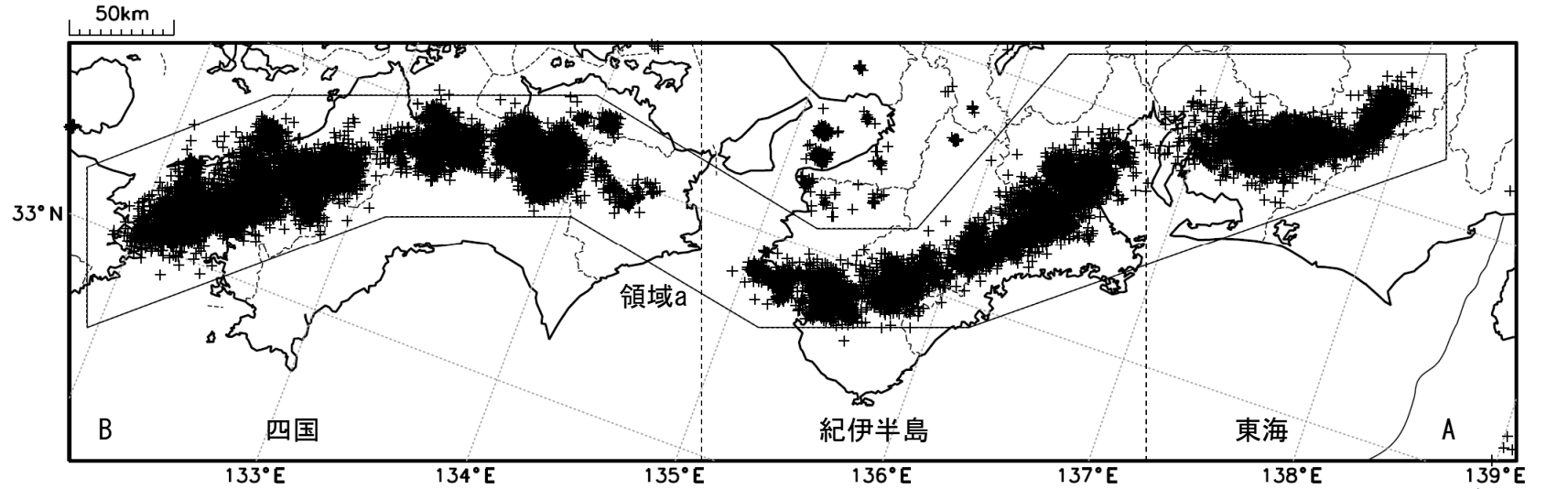


※2018年3月22日から、深部低周波地震（微動）の処理方法の変更（Matched Filter法の導入）により、それ以前と比較して検知能力が変わっている。

気象庁作成

深部低周波地震（微動）活動（2000年1月1日～2018年12月31日）

深部低周波地震（微動）は、「短期的ゆっくりすべり」に密接に関連する現象とみられており、プレート境界の状態の変化を監視するために、その活動を監視している。

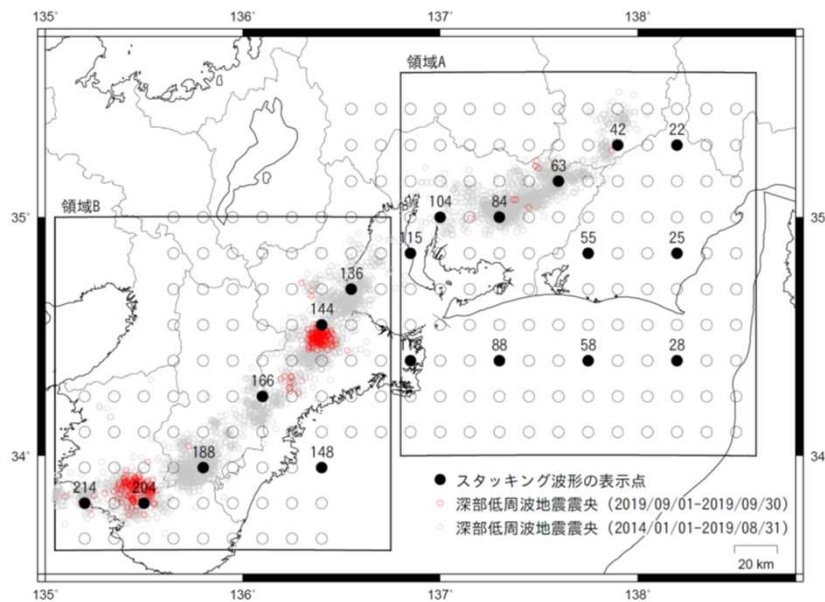


※2018年3月22日から、深部低周波地震（微動）の処理方法の変更（Matched Filter法の導入）により、それ以前と比較して検知能力が変わっている。
 ※時空間分布図中、灰色の期間は、それ以降と比較して十分な検知能力がなかったことを示す。

スタッキング波形によるプレート境界のすべりの監視

下図に示した監視点のスタッキングデータにおいて今期間に以下の点で短期的ゆっくりすべりによる有意な変化を検出した。

214番, 9月6日 Mw5.5



スタッキング波形は、上図の各監視点について、宮岡・横田(2012)の手法により、気象庁、静岡県、国立研究開発法人産業技術総合研究所のひずみ計データを基に作成している。

48時間階差のスタッキングデータのS/N比と、元データの観測値と理論値の一致度から有意な変化を検出し、規模を推定している。

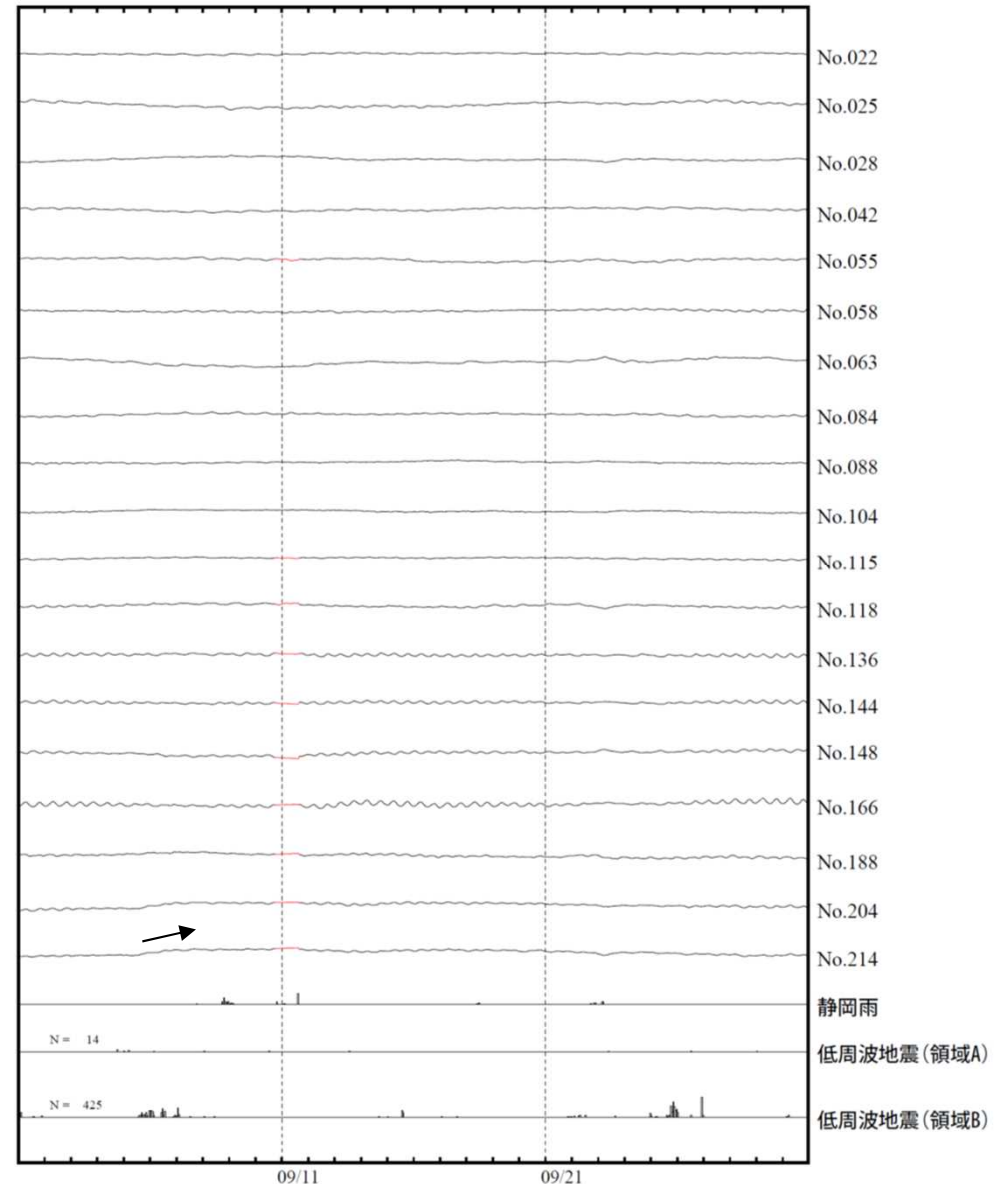
(参考)

- ・宮岡一樹・横田崇(2012): 地殻変動検出のためのスタッキング手法の開発, 地震, 2, 65, 205-218.
- ・露木貴裕・他(2017): 新しい地震活動等総合監視システム(EPOS)における地殻変動監視手法の改善, 験震時報, 81, 5.

スタッキング波形

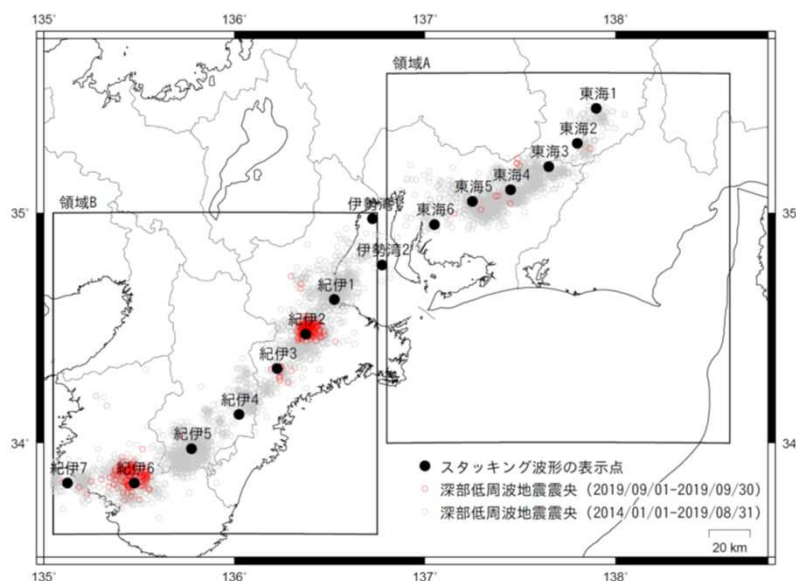
表示期間: 2019/09/01.00:00 - 2019/09/30.23:00

↑ 200 nstrain
50 nm/hour
50 回/hour



スタッキング波形による短期的ゆっくりすべりの監視

9月は下図に示した監視点のスタッキングデータにおいて、短期的ゆっくりすべりによる有意な変化を検出しなかった。



スタッキング波形は、上図の各監視点について、宮岡・横田(2012)の手法により、気象庁、静岡県、国立研究開発法人産業技術総合研究所のひずみ計データを基に作成している。

48時間階差のスタッキングデータのS/N比と、元データの観測値と理論値の一致度から有意な変化を検出し、規模を推定している。

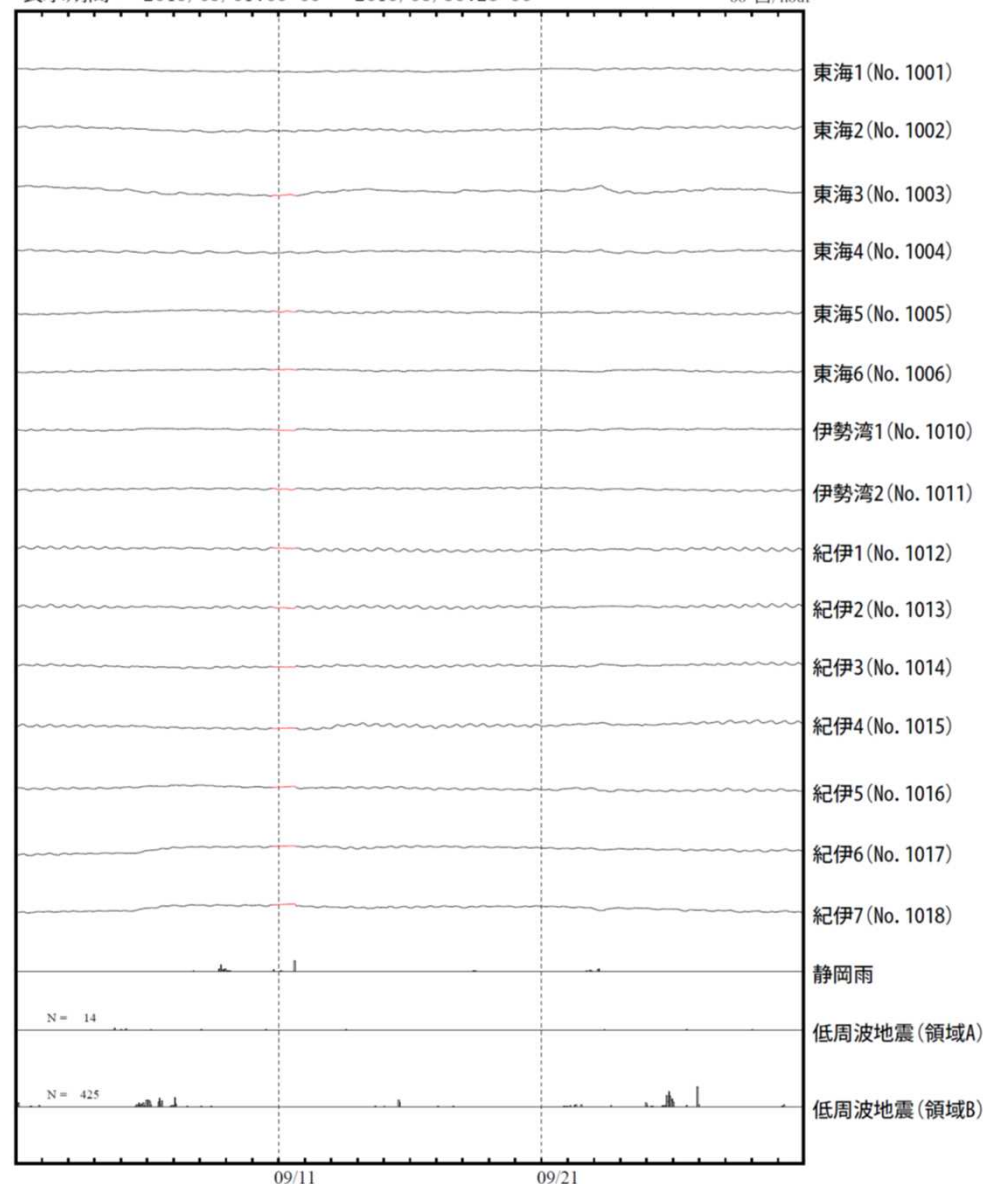
(参考)

- ・宮岡一樹・横田崇(2012):地殻変動検出のためのスタッキング手法の開発,地震,2,65,205-218.
- ・露木貴裕・他(2017):新しい地震活動等総合監視システム(EPOS)における地殻変動監視手法の改善, 験震時報,81,5.

スタッキング波形

表示期間: 2019/09/01.00:00 - 2019/09/30.23:00

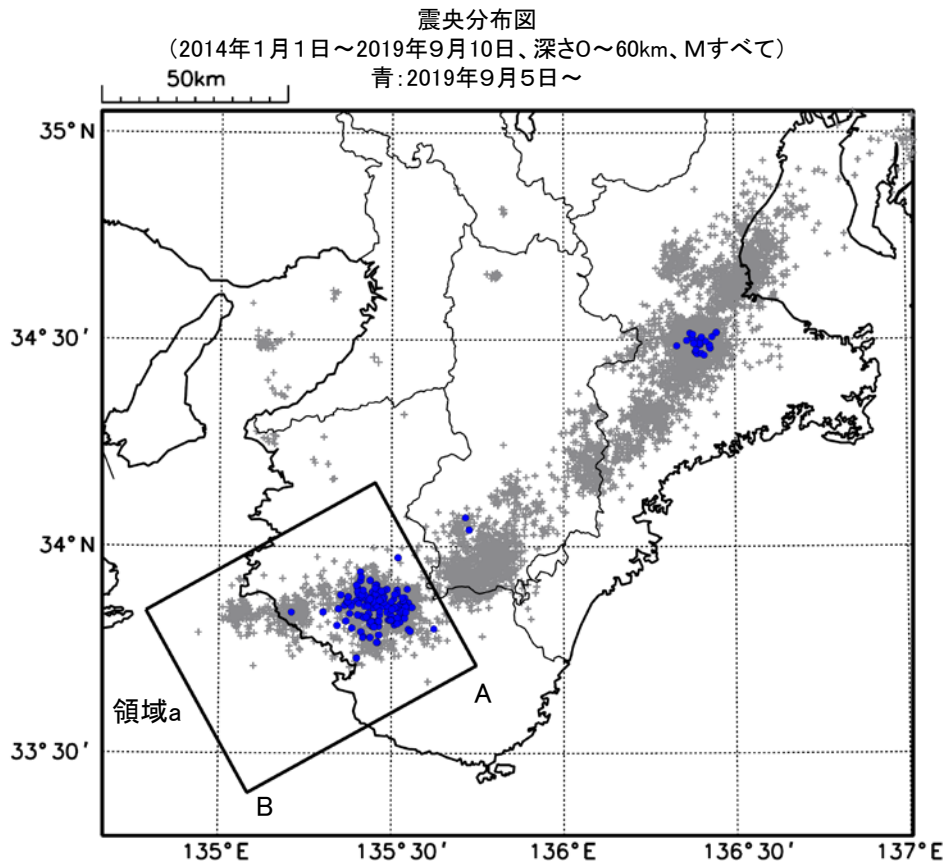
↑ 200 nstrain
50 mm/hour
50 回/hour



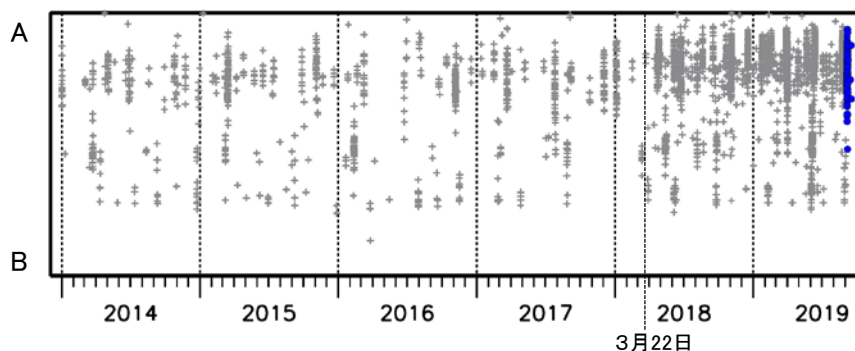
紀伊半島西部の深部低周波地震(微動)活動と短期的ゆっくりすべり

9月5日から8日にかけて、紀伊半島西部で深部低周波地震(微動)を観測した。周辺に設置されている複数のひずみ計で、深部低周波地震(微動)に関連すると思われるわずかな地殻変動が観測された。これらは、短期的ゆっくりすべりに起因すると推定される。

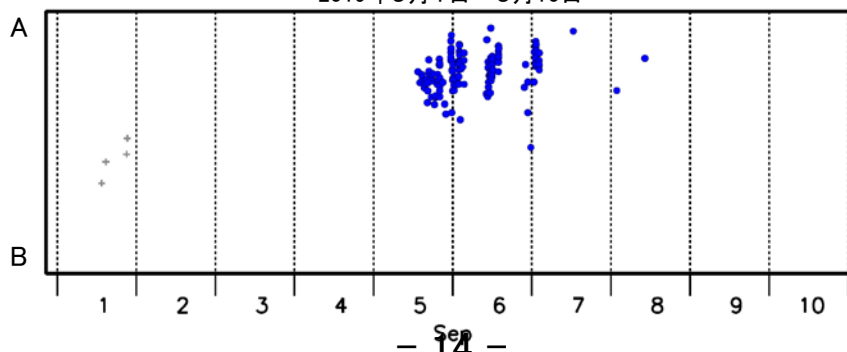
深部低周波地震(微動)活動



震央分布図の領域a内のAB方向の時空間分布図

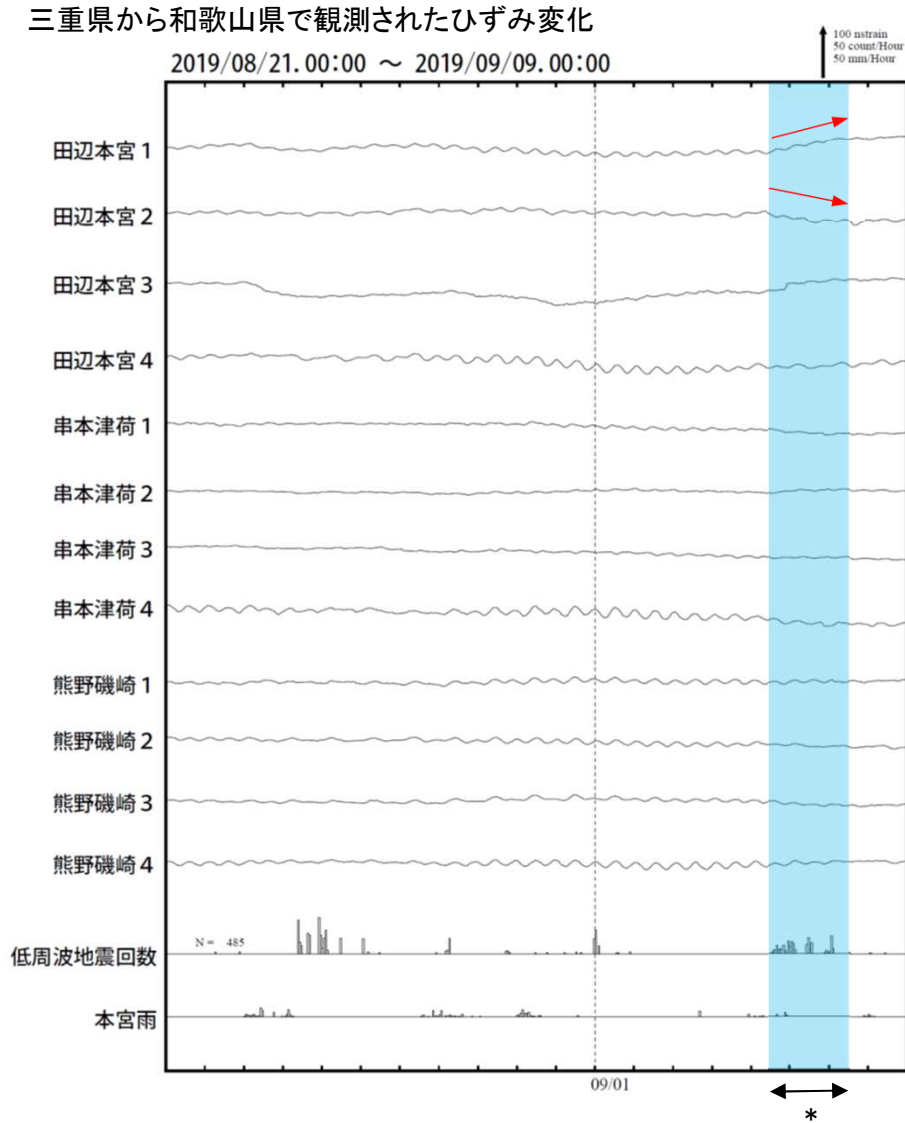


2019年9月1日～9月10日



※2018年3月22日から、深部低周波地震(微動)の処理方法の変更(Matched Filter法の導入)により、それ以前と比較して検知能力が変わっている。

紀伊半島西部で発生した短期的ゆっくりすべり(9月5日～7日)



* の期間にひずみの変化はみられるものの、断層モデルを精度よく求めることができなかった。

田辺本宮、串本津荷及び熊野磯崎は産業技術総合研究所のひずみ計である。

四国の深部低周波地震(微動)活動とゆっくりすべり

【四国東部】

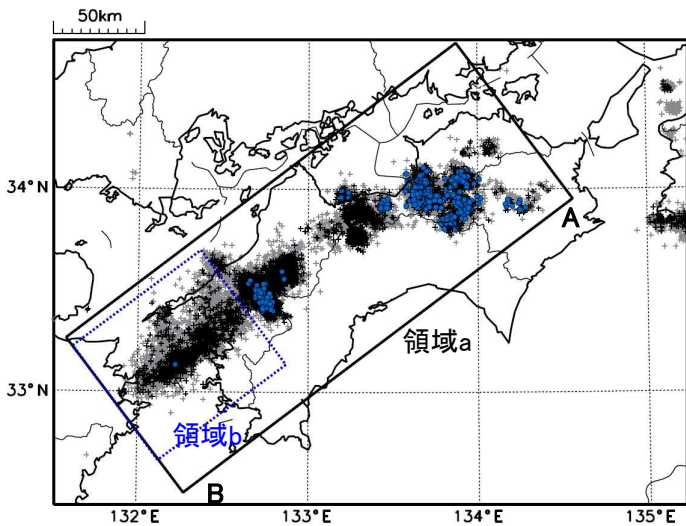
(A) 9月12日から20日にかけて、四国東部で深部低周波地震(微動)を観測した。深部低周波地震(微動)活動とほぼ同期して、周辺に設置されている複数のひずみ計で地殻変動を観測した。これらは、短期的ゆっくりすべりに起因すると推定される。

【四国西部の南西側(領域b:豊後水道とその付近)】

豊後水道付近(領域b)では、2018年秋頃から深部低周波地震(微動)活動が活発になっていたが、2019年6月頃から減衰傾向がみられている。また、2018年秋頃から、周辺に設置されている複数のひずみ計で地殻変動を観測している。これらは、豊後水道周辺のプレート境界深部において発生している長期的ゆっくりすべりに関係すると推定される。この長期的ゆっくりすべりは、2019年6月頃から停滞しているようにみえる。

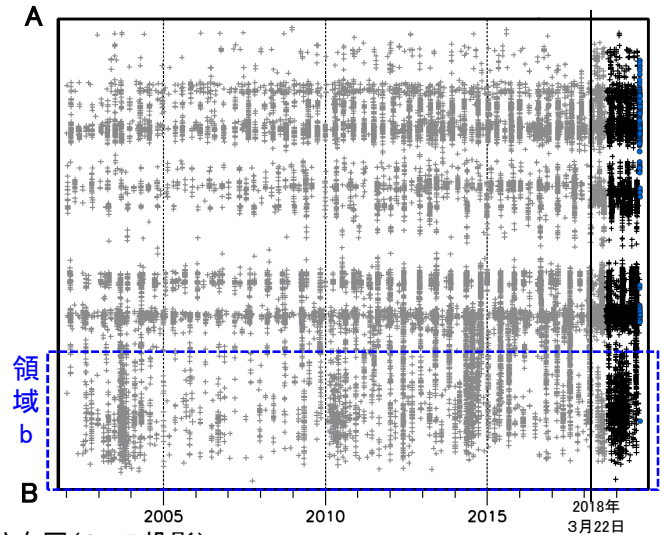
震央分布図

(2002年1月1日～2019年9月22日、深さ0～60km、Mすべて)
 黒:2018年9月1日～2019年9月11日、
 青:2019年9月12日～9月22日、灰:それ以外の期間



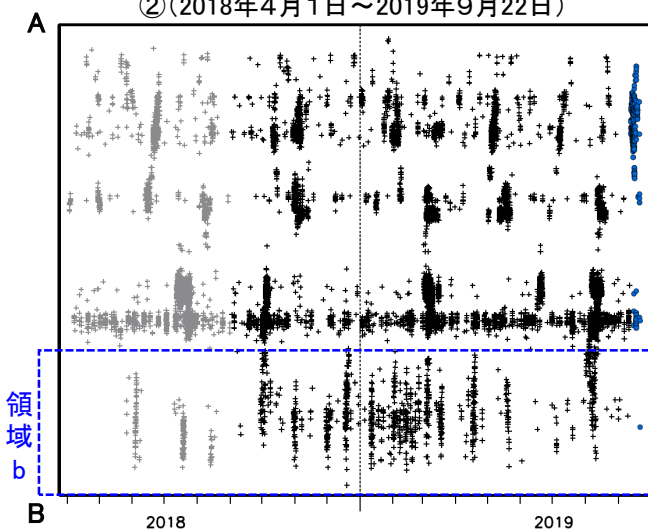
震央分布図の領域a内の時空間分布図(A-B投影)

①(2002年1月1日～2019年9月22日)

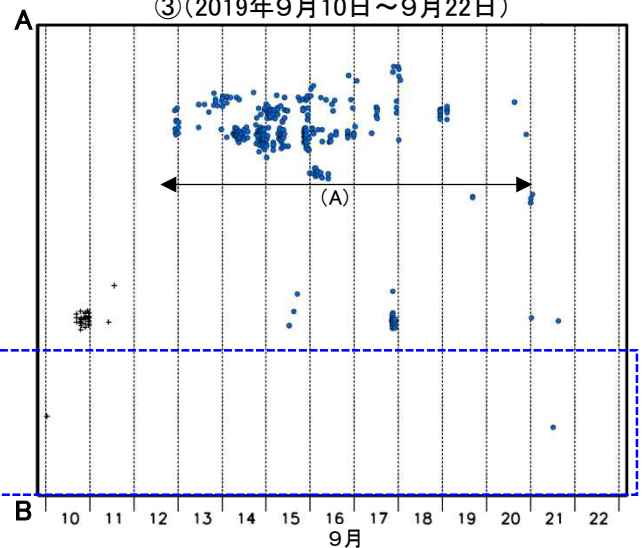


震央分布図の領域a内の時空間分布図(A-B投影)

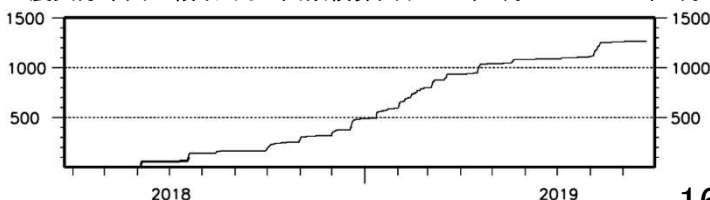
②(2018年4月1日～2019年9月22日)



③(2019年9月10日～9月22日)



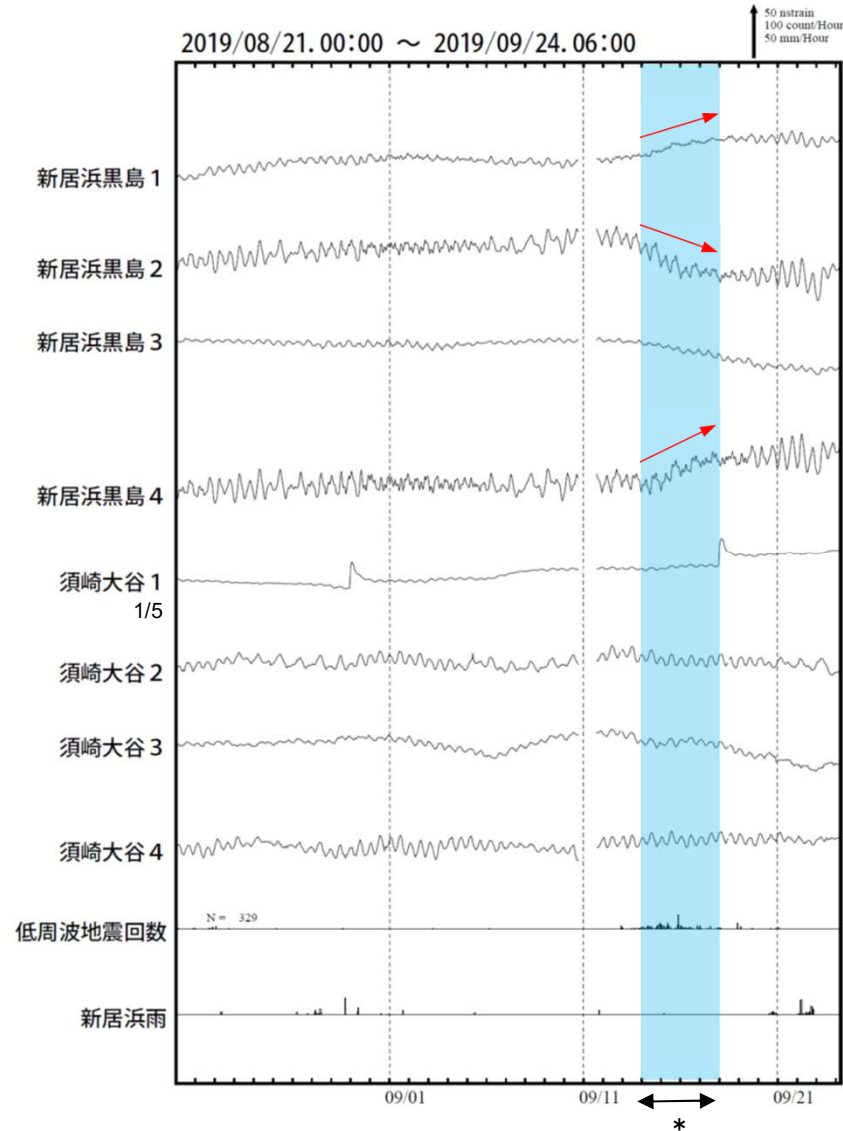
震央分布図の領域b内の回数積算図(2018年4月1日～2019年9月22日)



※2018年3月22日から、深部低周波地震(微動)の処理方法の変更(Matched Filter法の導入)により、それ以前と比較して検知能力が変わっている。

四国東部で発生した短期的ゆっくりすべり(9月14日～17日)

愛媛県から高知県で観測されたひずみ変化

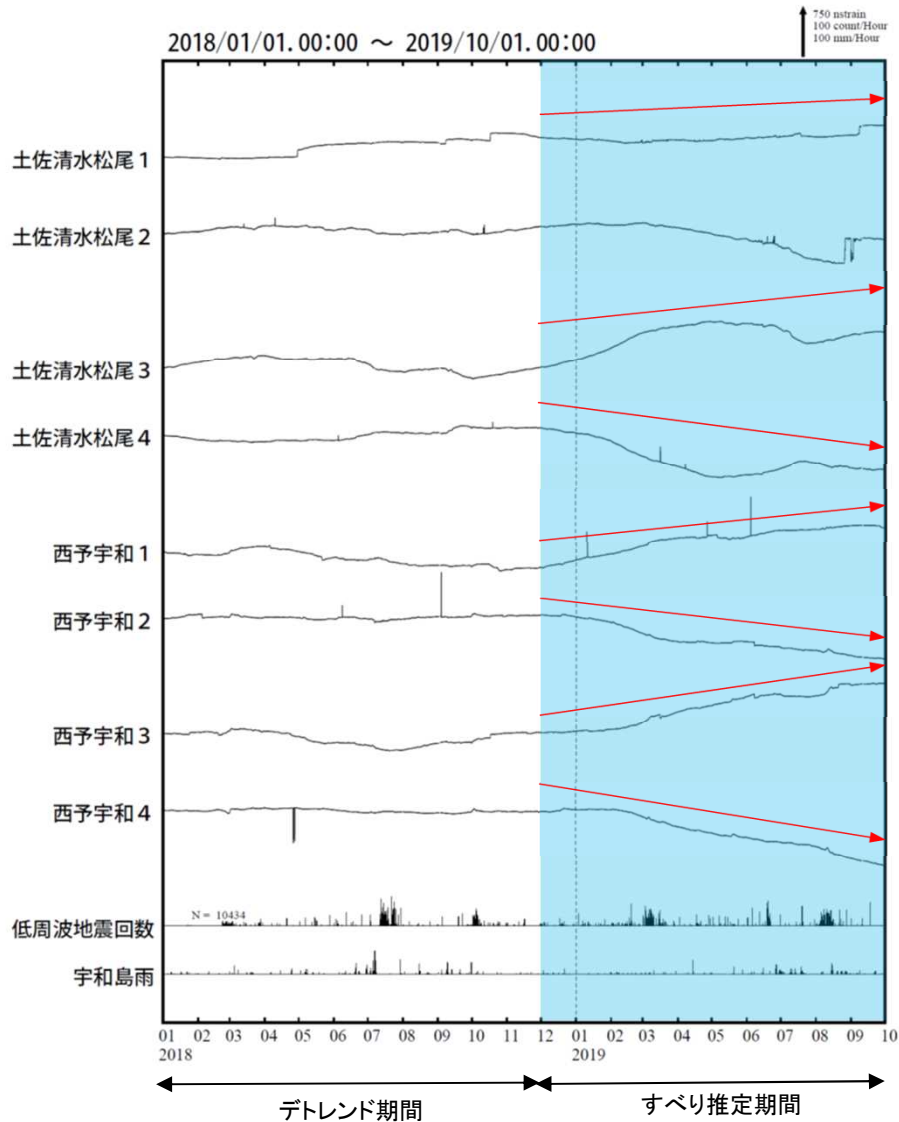


* の期間にひずみの変化はみられるものの、断層モデルを精度よく求められなかった。

新居浜黒島及び須崎大谷は産業技術総合研究所のひずみ計である。

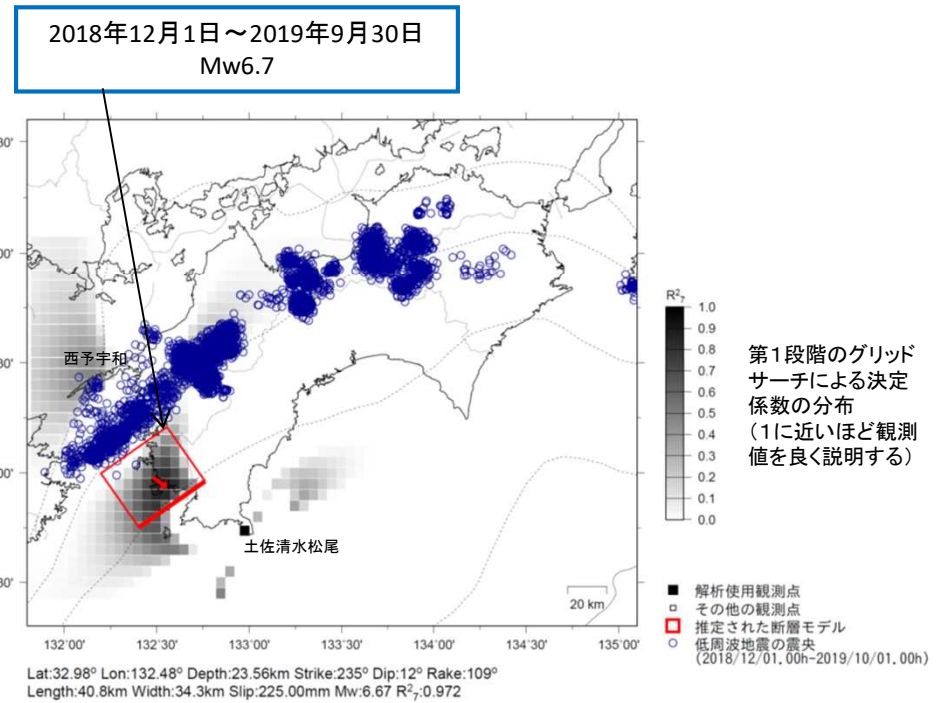
豊後水道で発生している長期的ゆっくりすべり

愛媛県から高知県で観測されたひずみ変化



土佐清水松尾及び西予宇和は産業技術総合研究所のひずみ計である。

ひずみ変化から推定される断層モデル



左図に観測されたひずみ変化のうち、赤矢印を付した観測点での変化量を元にすべり推定を行ったところ、上図に示す領域にすべり域が求まった。

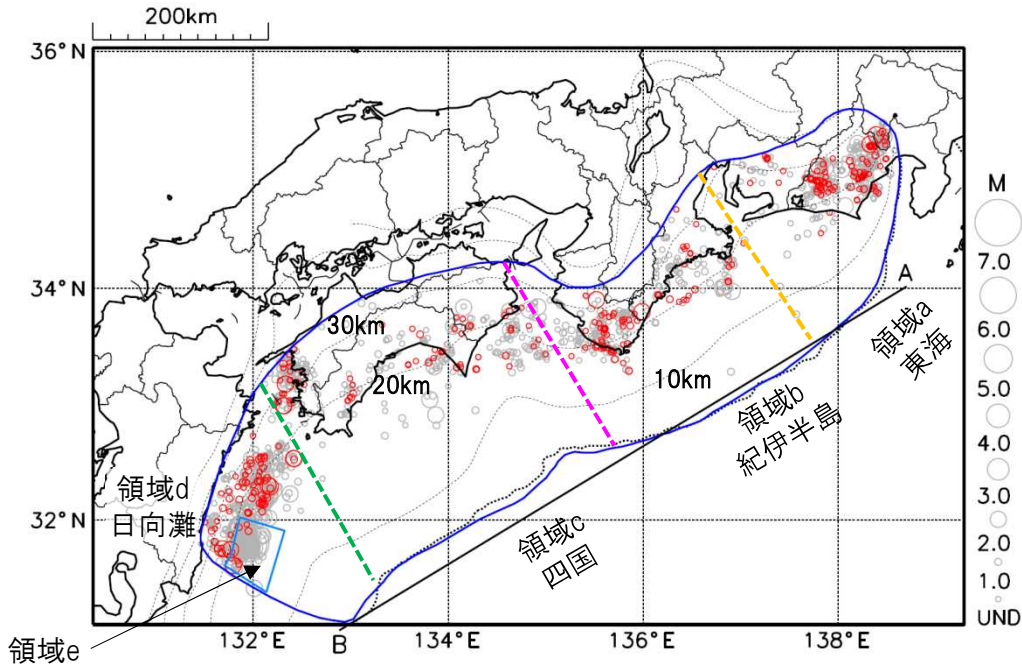
断層モデルの推定は、産総研の解析方法(板場ほか, 2012)を参考に以下の2段階で行う。
 ・断層サイズを20km×20kmに固定し、位置を0.05度単位でグリッドサーチにより推定する。
 ・その位置を中心にして、他の断層パラメータの最適解を求める。

プレート境界とその周辺の地震活動

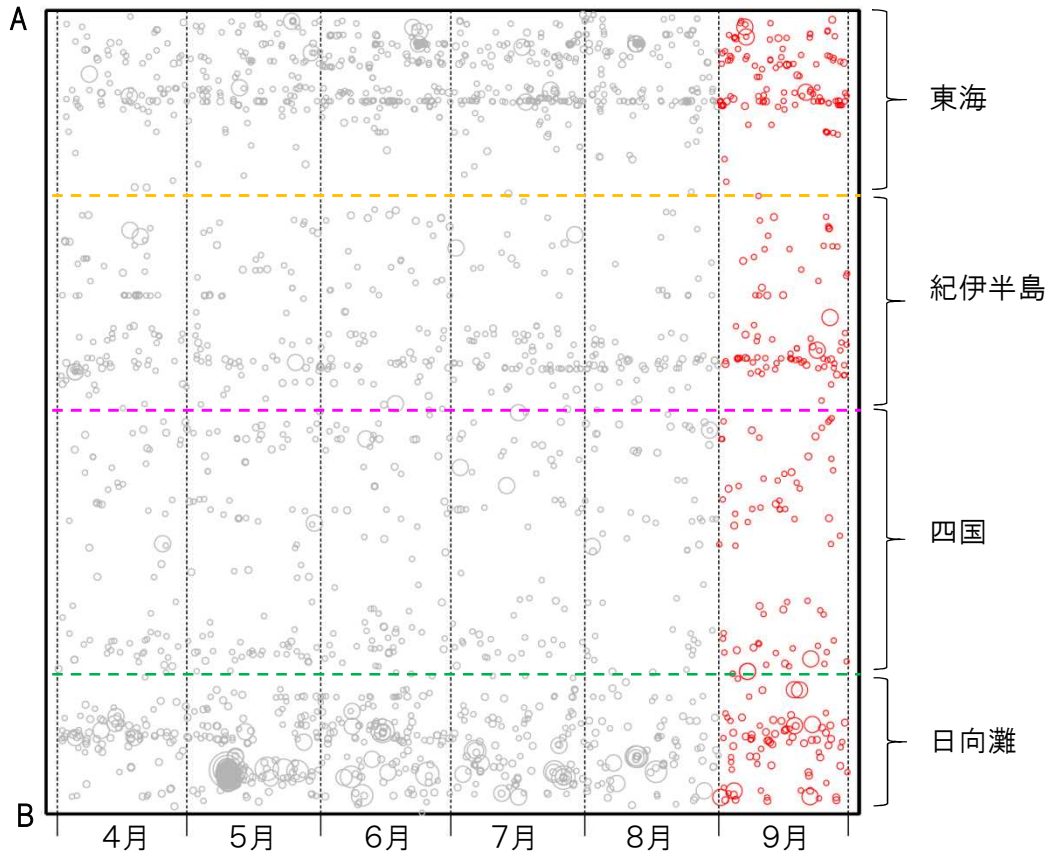
フィリピン海プレート上面の深さから±6km未満の地震を表示している。
日向灘の領域e内のみ、深さ20km～30kmの地震を追加している。

震央分布図

(2019年4月1日～2019年9月30日、M全て、2019年9月の地震を赤く表示)



南海トラフ巨大地震の想定震源域内の時空間分布図(A-B投影)



- ・フィリピン海プレート上面の深さは、Hirose et al.(2008)、Baba et al.(2002)による。震央分布図中の点線は10kmごとの等深線を示す。
- ・今期間の地震のうち、M3.2以上の地震で想定南海トラフ地震の発震機構解と類似の型の地震に吹き出しを付している。吹き出しの右下の数値は、フィリピン海プレート上面の深さからの差(+は浅い、-は深い)を示す。
- ・発震機構解の横に「S」の表記があるものは、精度がやや劣るものである。

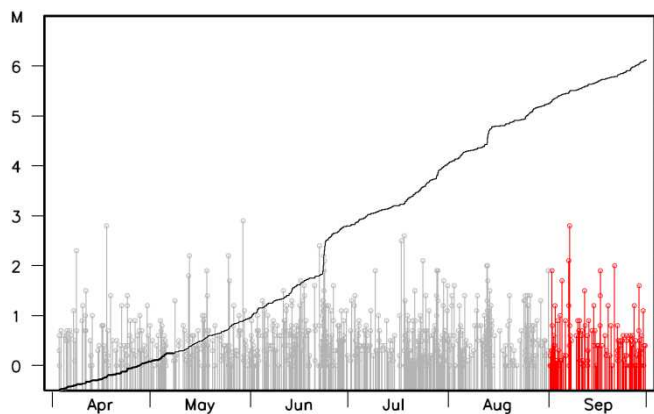
気象庁作成

プレート境界とその周辺の地震活動

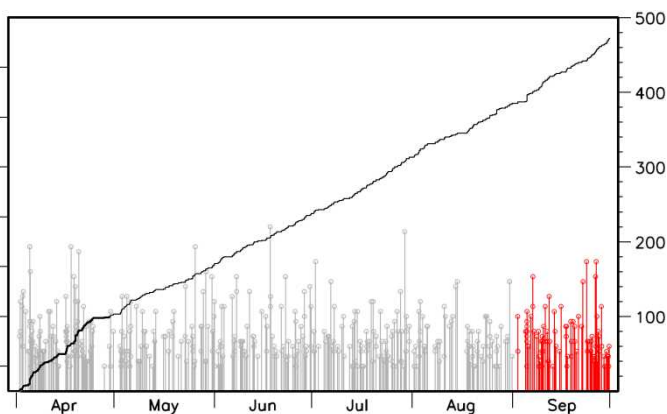
フィリピン海プレート上面の深さから±6km未満の地震を表示している。

震央分布図の各領域内のMT図・回数積算図

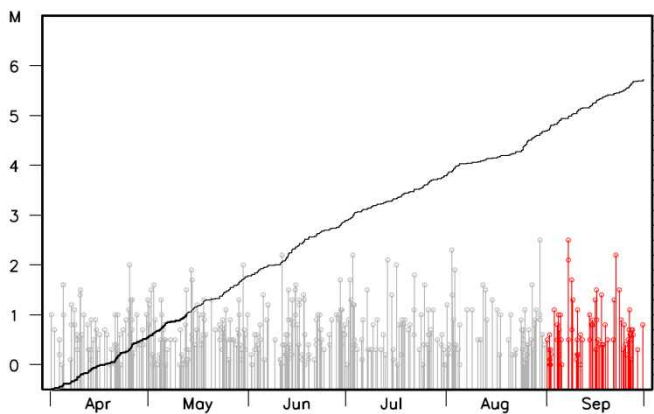
領域a内(東海)



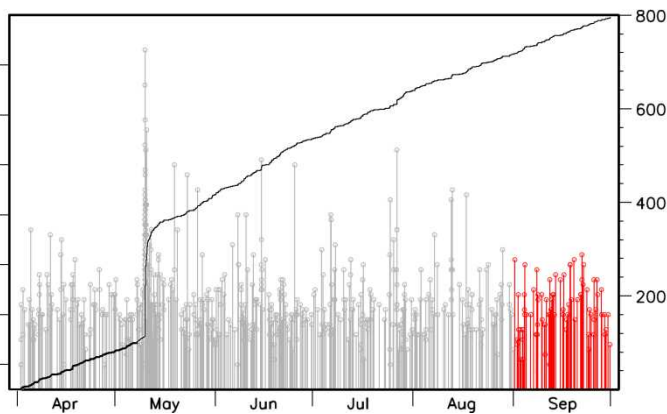
領域b内(紀伊半島)



領域c内(四国)



領域d内(日向灘)

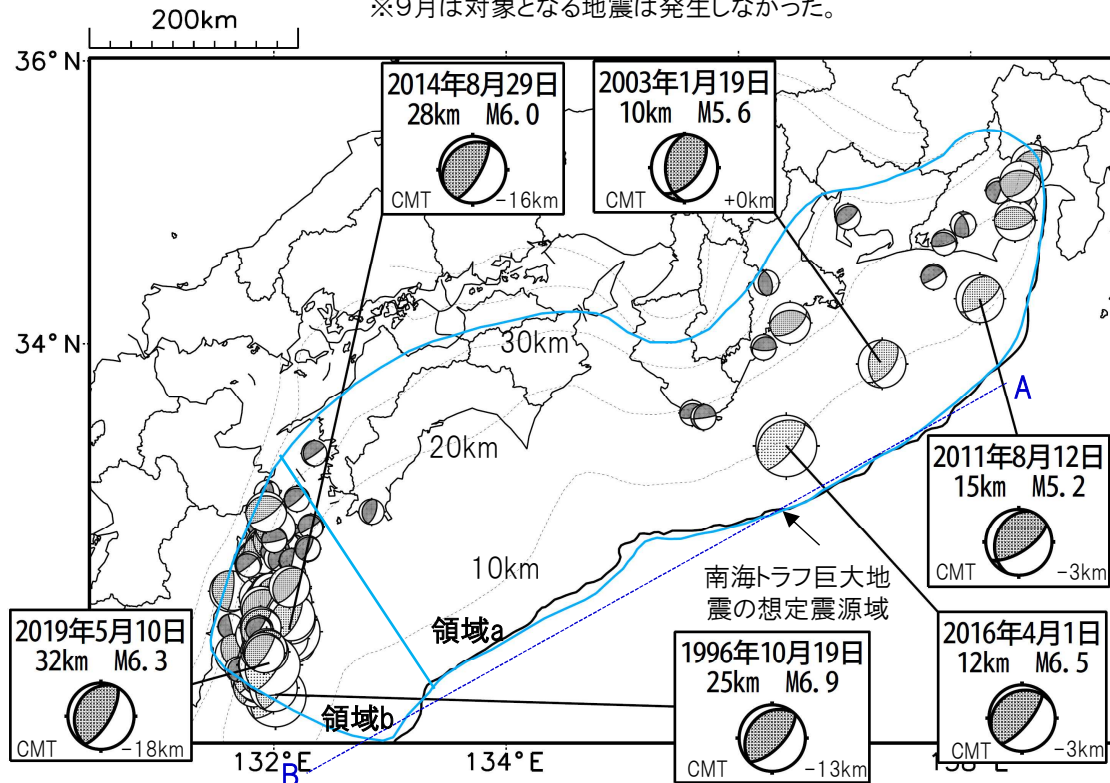


※M全ての地震を表示していることから、検知能力未満の地震も表示しているため、回数積算図は参考として表記している。

想定南海トラフ地震の発震機構解と類似の型の地震

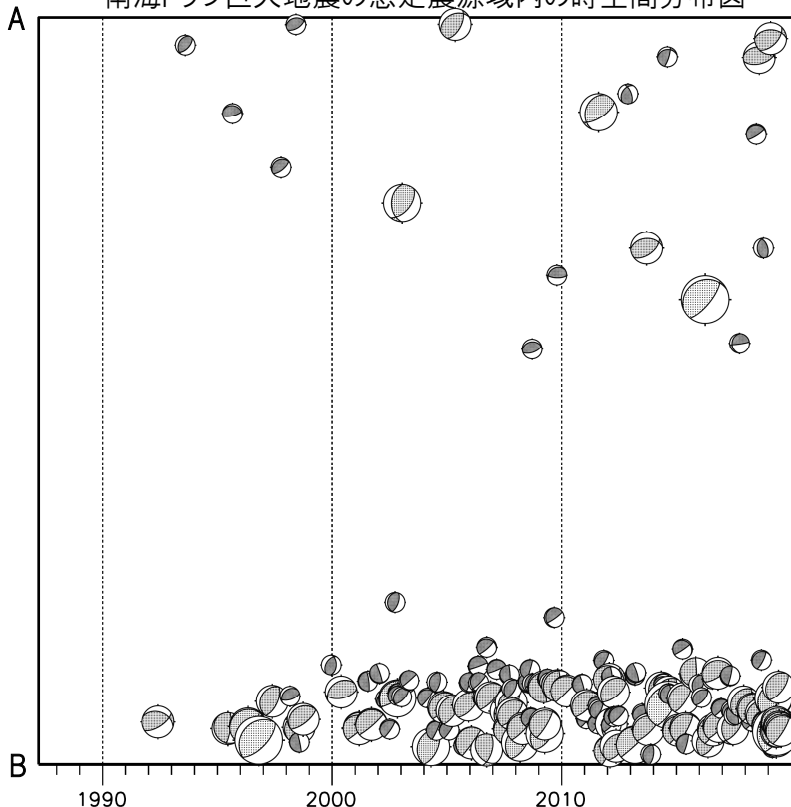
震央分布図(1987年9月1日～2019年9月30日、M \geq 3.2、2019年9月の地震を赤く表示)

※9月は対象となる地震は発生しなかった。



- ・フィリピン海プレート上面の深さは、Hirose et al.(2008)、Baba et al.(2002)による。震央分布図中の点線は10kmごとの等深線を示す。
- ・今期間に発生した地震(赤)、日向灘のM6.0以上、その他の地域のM5.0以上の地震に吹き出しを付けている。
- ・発震機構解の横に「S」の表記があるものは、精度がやや劣るものである。
- ・吹き出しの右下の数値は、フィリピン海プレート上面の深さからの差を示す。+は浅い、-は深いことを示す。
- ・吹き出しに「CMT」と表記した地震は、発震機構解と深さはCMT解による。Mは気象庁マグニチュードを表記している。
- ・発震機構解の解析基準は、解析当時の観測網等に応じて変遷しているため一定ではない。

南海トラフ巨大地震の想定震源域内の時空間分布図



プレート境界型の地震と類似の型の発震機構解を持つ地震は以下の条件で抽出した。

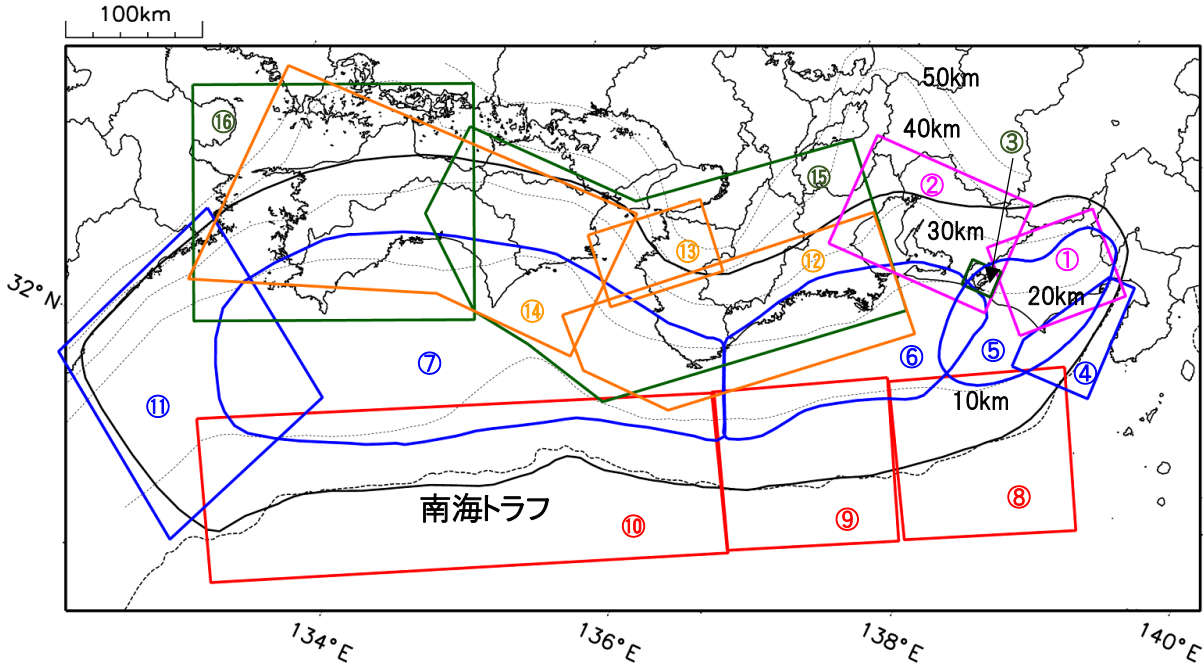
【抽出条件】

- ・M3.2以上の地震
- ・領域a内(南海トラフの想定最大規模の想定震源域内)で発生した地震
- ・発震機構解が以下の条件を全て満たしたものを抽出した。
 - P軸の傾斜角が45度以下
 - P軸の方位角が65度以上180度以下(※)
 - T軸の傾斜角が45度以上
 - N軸の傾斜角が30度以下
- ※以外の条件は、東海地震と類似の型を抽出する条件と同様
- ・発震機構解は、CMT解と初動解の両方で検索をした。
- ・同一の地震で、CMT解と初動解の両方がある場合はCMT解を選択している。
- ・東海地方から四国地方(領域a)は、フィリピン海プレート上面の深さから±10km未満の地震のみ抽出した。日向灘(領域b)は、+10km～-20km未満の震源を抽出した。CMT解はセントロイドの深さを使用した。

気象庁作成

南海トラフ巨大地震の想定震源域とその周辺の地震活動状況

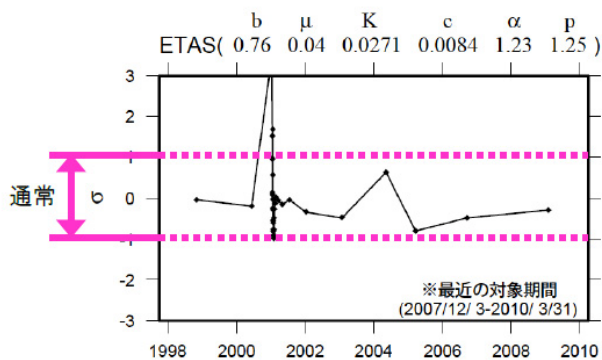
◆地震活動状況の監視・評価を行っている領域



- * 活動の監視・評価を行っている領域に番号を付している。
- * Hirose et al.(2008)、Baba et al.(2002)によるプレート境界の等深線を破線で示す。
- * 黒色実線は、南海トラフ巨大地震の想定震源域を示す。

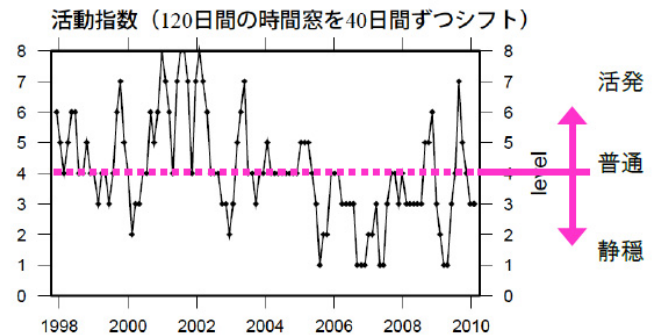
◆監視・評価に使用している指標等について

ETAS(σ 値) …理論上の地震活動からのずれ

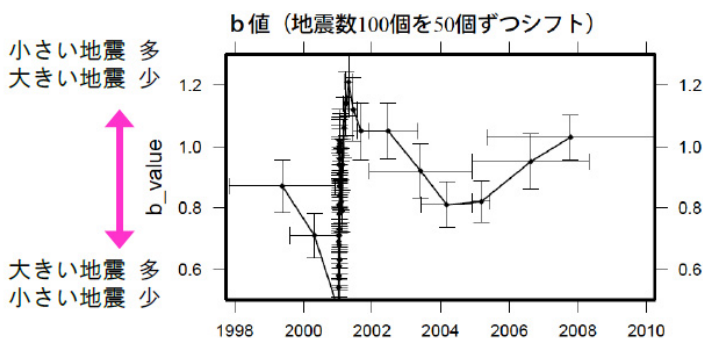


地震活動指数

…基準期間の活動と比較し、活発か静穏かを示す指標



b値 …地震の規模 (M) の相対分布



地震回数の指数化

指数	確率 (%)	地震数
8	1	多い
7	4	やや多い
6	10	
5	15	ほぼ平常
4	40	
3	15	やや少ない
2	10	
1	4	少ない
0	1	

気象庁作成

南海トラフ巨大地震の想定震源域とその周辺の地震活動指数

2019年9月30日

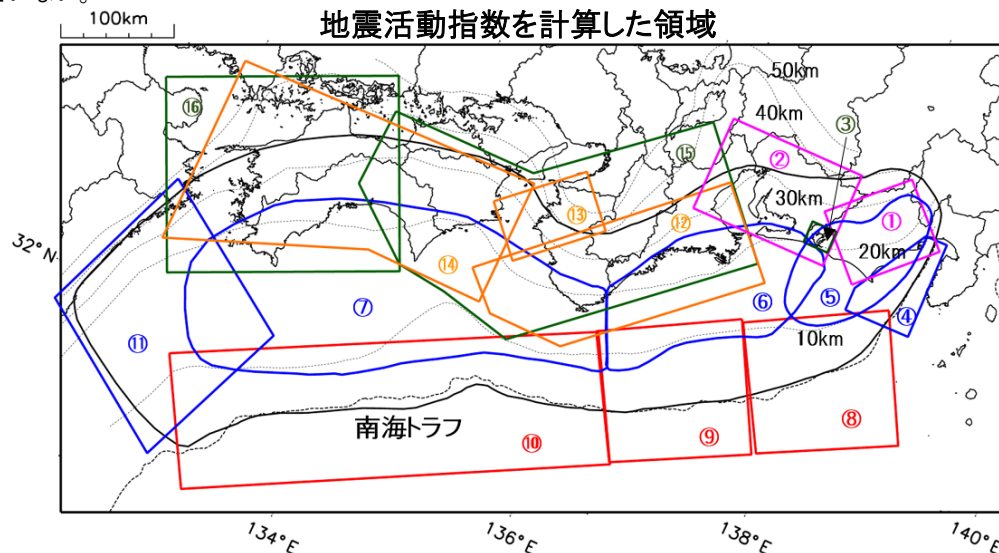
領域	①静岡県 中西部		②愛知県		③浜名湖 周辺	④駿河 湾	⑤東海	⑥南海	⑦南海
	地	プ	地	プ	プ	全	全	全	全
地震活動指数	7	3	5	4	7	4	5	4	4
平均回数	16.4	18.4	26.6	13.6	13.2	13.3	18.3	19.7	21.2
MLきい値	1.1		1.1		1.1	1.4	1.5	2.0	2.0
クラスタ 除去	距離	3km		3km		3km	10km	10km	10km
	日数	7日		7日		7日	10日	10日	10日
対象期間	60日	90日	60日	30日	360日	180日	90日	360日	90日
深さ	0~ 30km	0~ 60km	0~ 30km	0~ 60km	0~ 60km	0~ 60km	0~ 60km	0~ 100km	0~ 100km

領域	南海トラフ沿い		⑪日向 灘	⑫紀伊 半島	⑬和歌 山	⑭四国	⑮紀伊半 島	⑯四国
	⑧東側	⑩西側	全	地	地	地	プ	プ
	全	全	全	地	地	地	プ	プ
地震活動指数	6	4	7	3	4	5	1	4
平均回数	12.0	15.1	20.6	22.9	42.2	30.3	27.6	28.1
MLきい値	2.5	2.5	2.0	1.5	1.5	1.5	1.5	1.5
クラスタ 除去	距離	10km	10km	10km	3km	3km	3km	3km
	日数	10日	10日	10日	7日	7日	7日	7日
対象期間	720日	360日	60日	120日	60日	90日	30日	30日
深さ	0~ 100km	0~ 100km	0~ 100km	0~ 20km	0~ 20km	0~ 20km	20~ 100km	20~ 100km

* 基準期間は、全領域1997年10月1日～2019年9月30日

* 領域欄の「地」は地殻内、「プ」はフィリピン海プレート内で発生した地震であることを示す。ただし、震源の深さから便宜的に分類しただけであり、厳密に分離できていない場合もある。「全」は浅い地震から深い地震まで全ての深さの地震を含む。

* ⑨の領域(三重県南東沖)は、2004年9月5日以降の地震活動の影響で、地震活動指数を正確に計算できないため、掲載していない。



地震活動指数と地震数

地震回数の指数化		
指数	確率 (%)	地震数
8	1	多い
7	4	やや多い
6	10	
5	15	
4	40	ほぼ平常
3	15	
2	10	やや少ない
1	4	
0	1	少ない

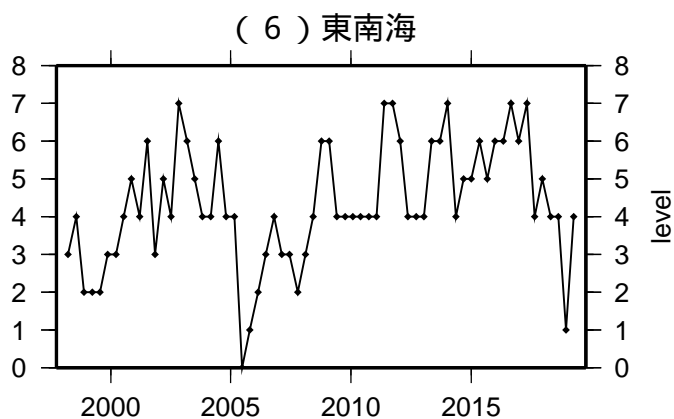
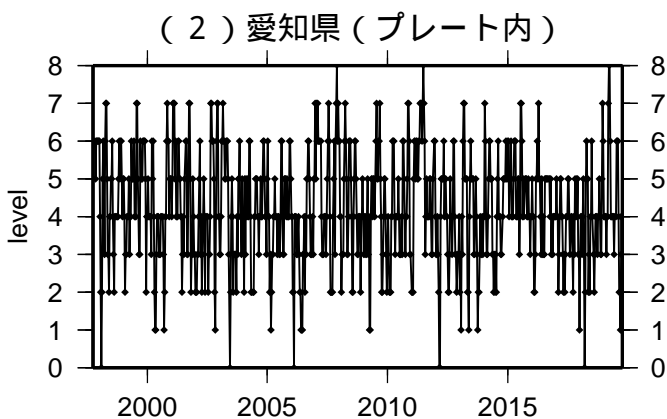
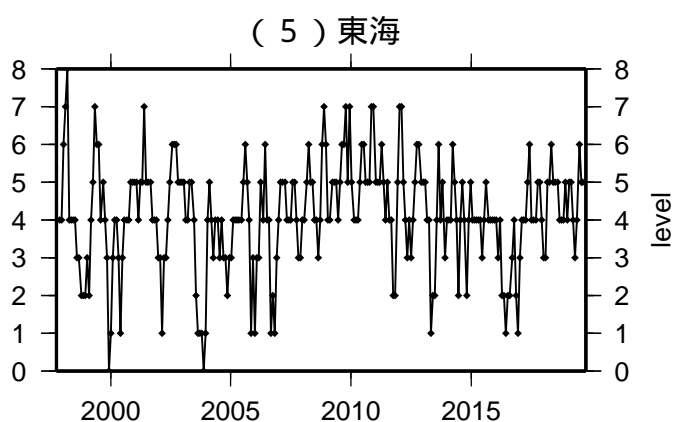
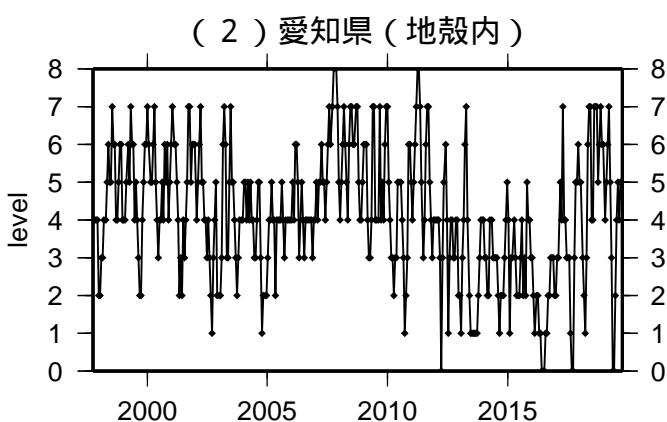
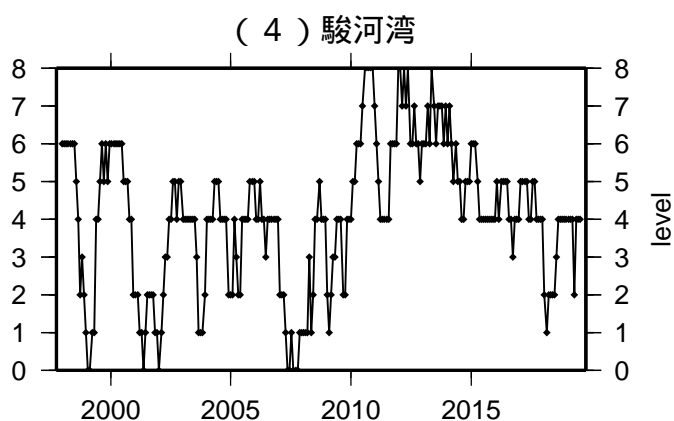
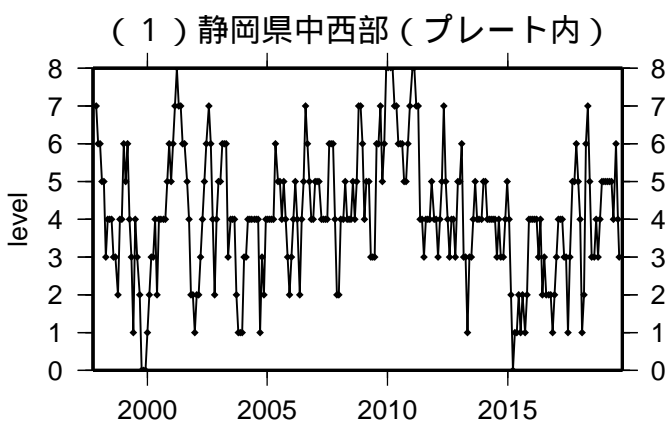
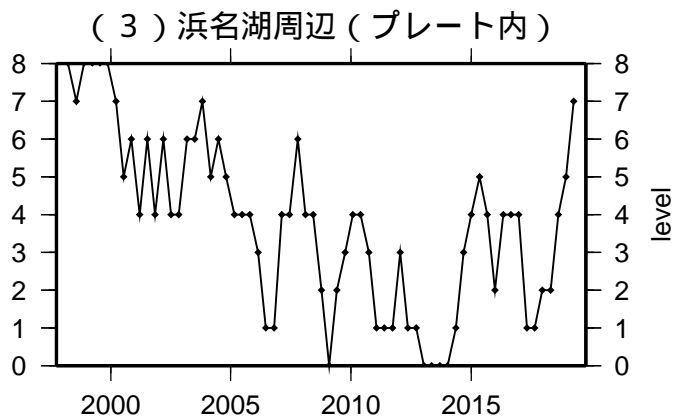
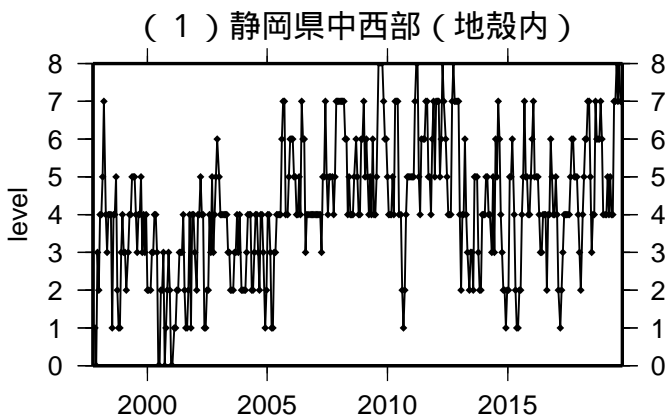
* 黒色実線は、南海トラフ巨大地震の想定震源域を示す。

* Hirose et al.(2008)、Baba et al.(2002)によるプレート境界の等深線を破線で示す。

気象庁作成

地震活動指数一覧

2019年09月30日

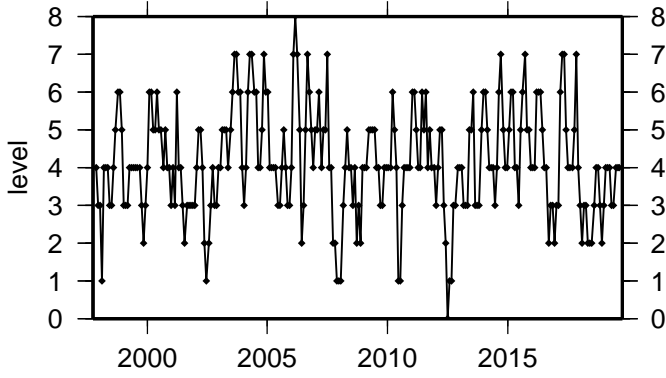


活動指数	0	1	2	3	4	5	6	7	8
確率 (%)	1	4	10	15	40	15	10	4	1
地震数	少	←	←	←	←	←	←	←	多

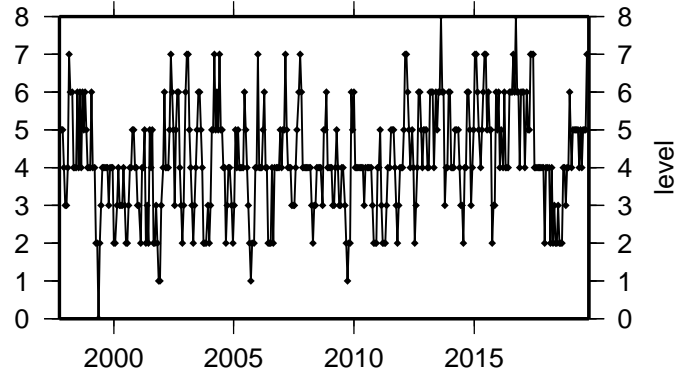
地震活動指数一覽

2019年09月30日

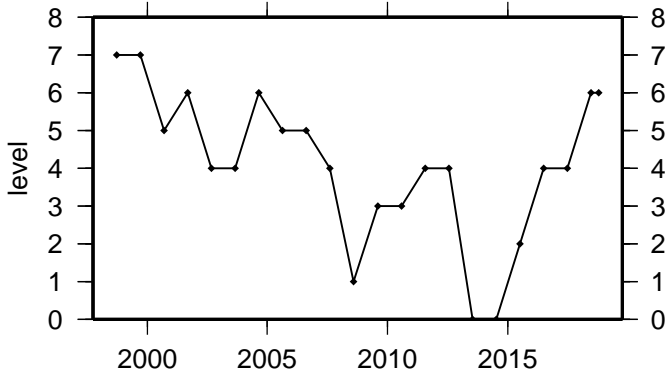
(7) 南海



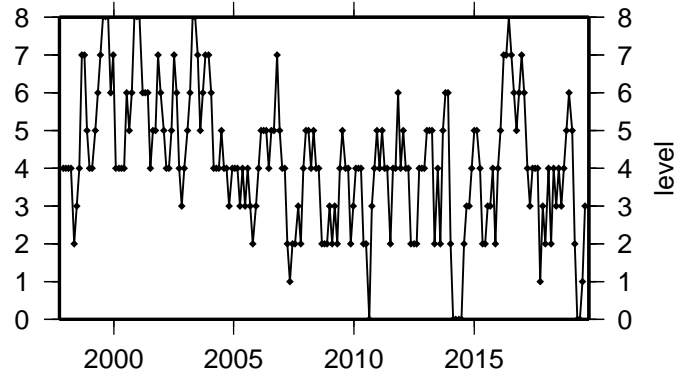
(11) 日向灘



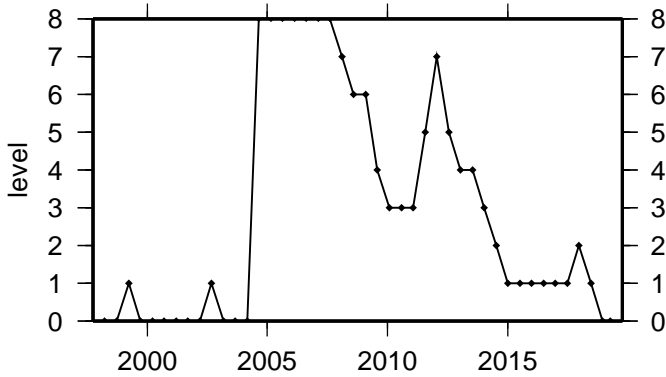
(8) 南海トラフ沿い(東側)



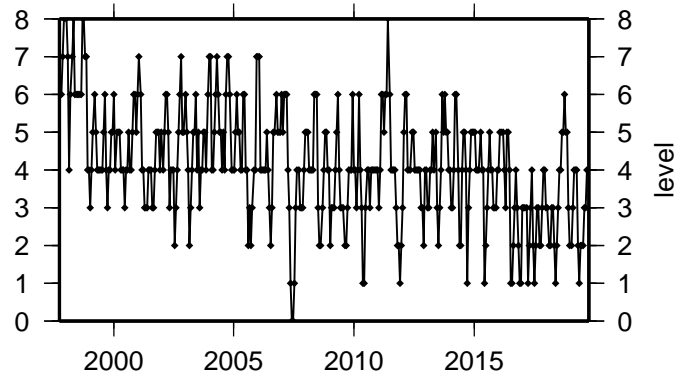
(12) 紀伊半島(地殻内)



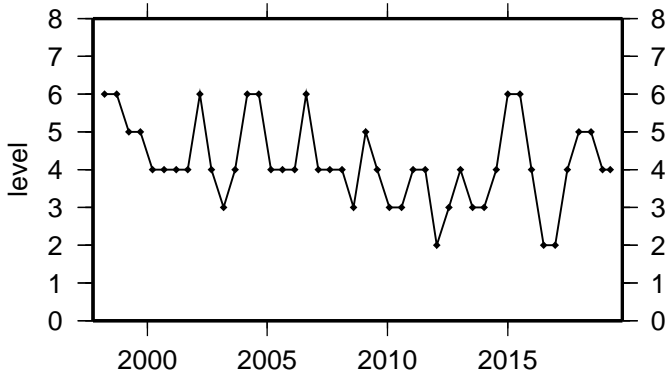
(9) 南海トラフ沿い(三重県沖)



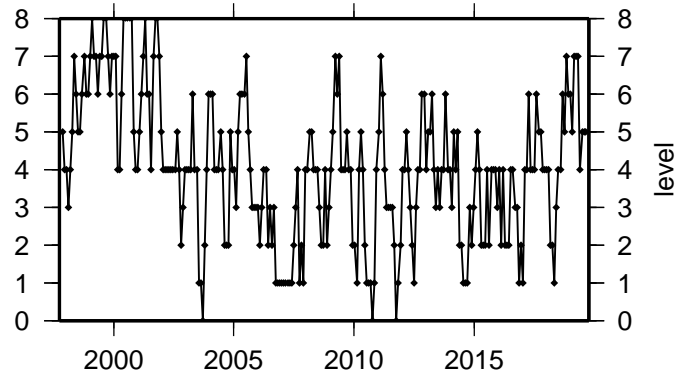
(13) 和歌山(地殻内)



(10) 南海トラフ沿い(西側)

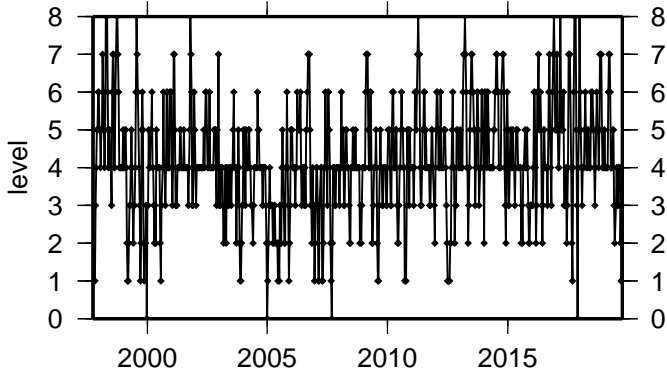


(14) 四国(地殻内)

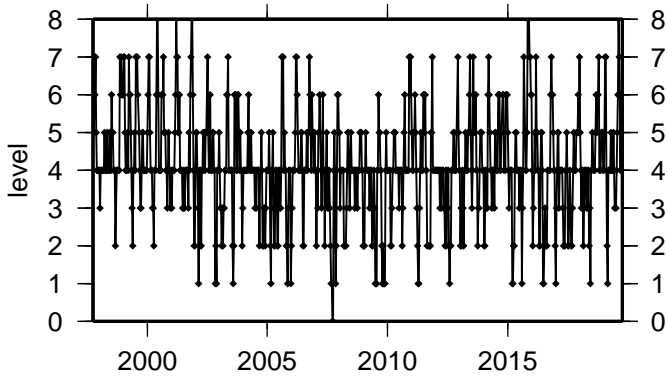


活動指数	0	1	2	3	4	5	6	7	8
確率(%)	1	4	10	15	40	15	10	4	1
地震数	少	←	←	←	←	←	←	←	→

(1 5) 紀伊半島 (プレート内)



(1 6) 四国 (プレート内)



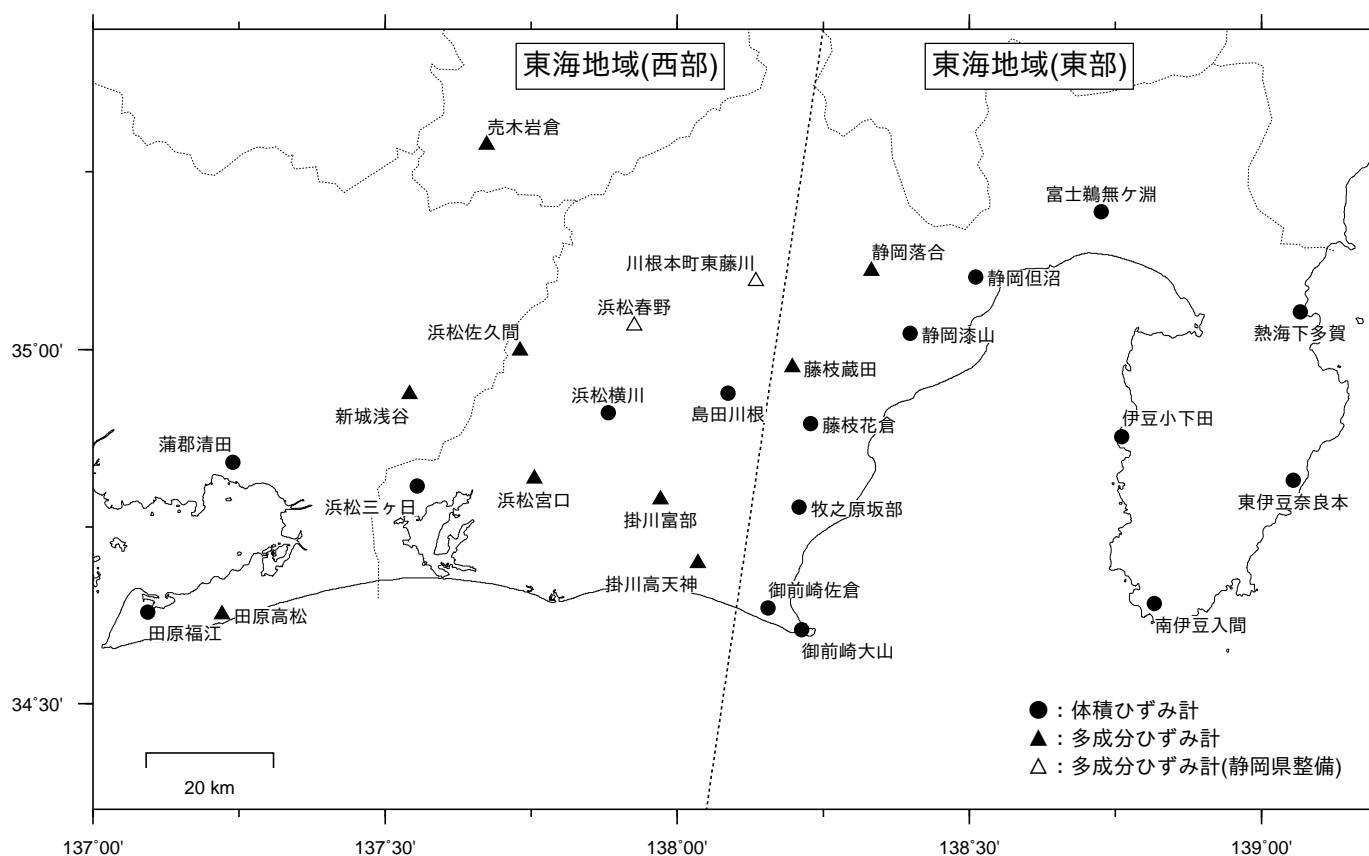
活動指数	0	1	2	3	4	5	6	7	8
確率 (%)	1	4	10	15	40	15	10	4	1
地震数	少	← 平常		多					

ひずみ計による観測結果（2019年4月1日～2019年9月30日）

短期的ゆっくりすべりに起因すると見られる次の地殻変動がひずみ計で観測された。

- SSE1：2019年4月6日から7日にかけて観測された。（第19回評価検討会資料参照）
- SSE2：2019年4月22日から23日にかけて観測された。（第19回評価検討会資料参照）
- SSE3：2019年6月11日から15日にかけて観測された。（第21回評価検討会資料参照）
- SSE4：2019年6月25日から28日にかけて観測された。（第22回評価検討会資料参照）
- SSE5：2019年6月29日から7月3日にかけて観測された。（第22回評価検討会資料参照）
- SSE6：2019年8月3日から6日にかけて観測された。（第23回評価検討会資料参照）

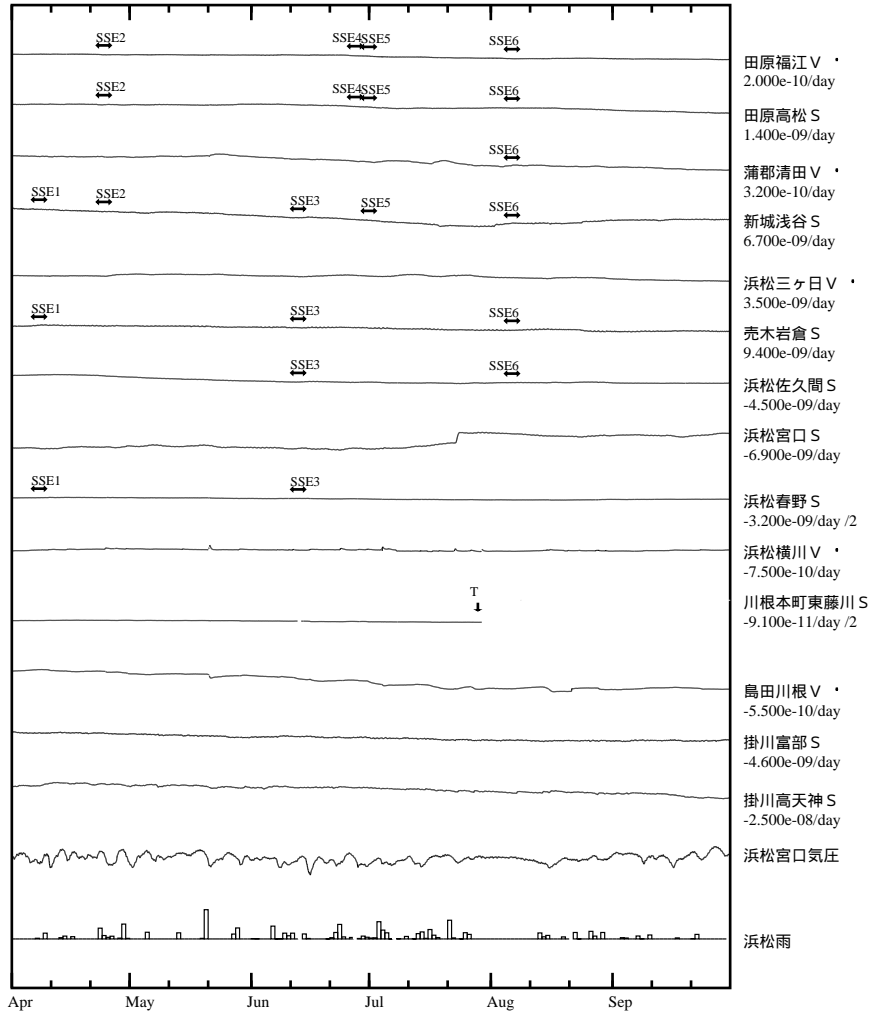
ひずみ計の配置図



※観測点名の記号Vは体積ひずみを、Sは多成分ひずみ計で観測した線ひずみより計算した面積ひずみを示す。
 ※観測点名の下の「D/day(/M)」は、一日あたりのトレンド変化量をDとして補正していること
 及び縮尺を1/M倍にして表示していることを示す。
 ※観測点名、観測成分名右側の縦棒は、平常時における24時間階差の99.9%タイル値を示す。
 ※多成分ひずみ計成分名の()内は測定方位、[]内は面積ひずみ計算に用いた成分を示す。
 ※多成分ひずみ計の最大剪断ひずみ、面積ひずみ及び主軸方向は、広域のひずみに換算して算出している。

東海地域（西部） ひずみ変化 時間値

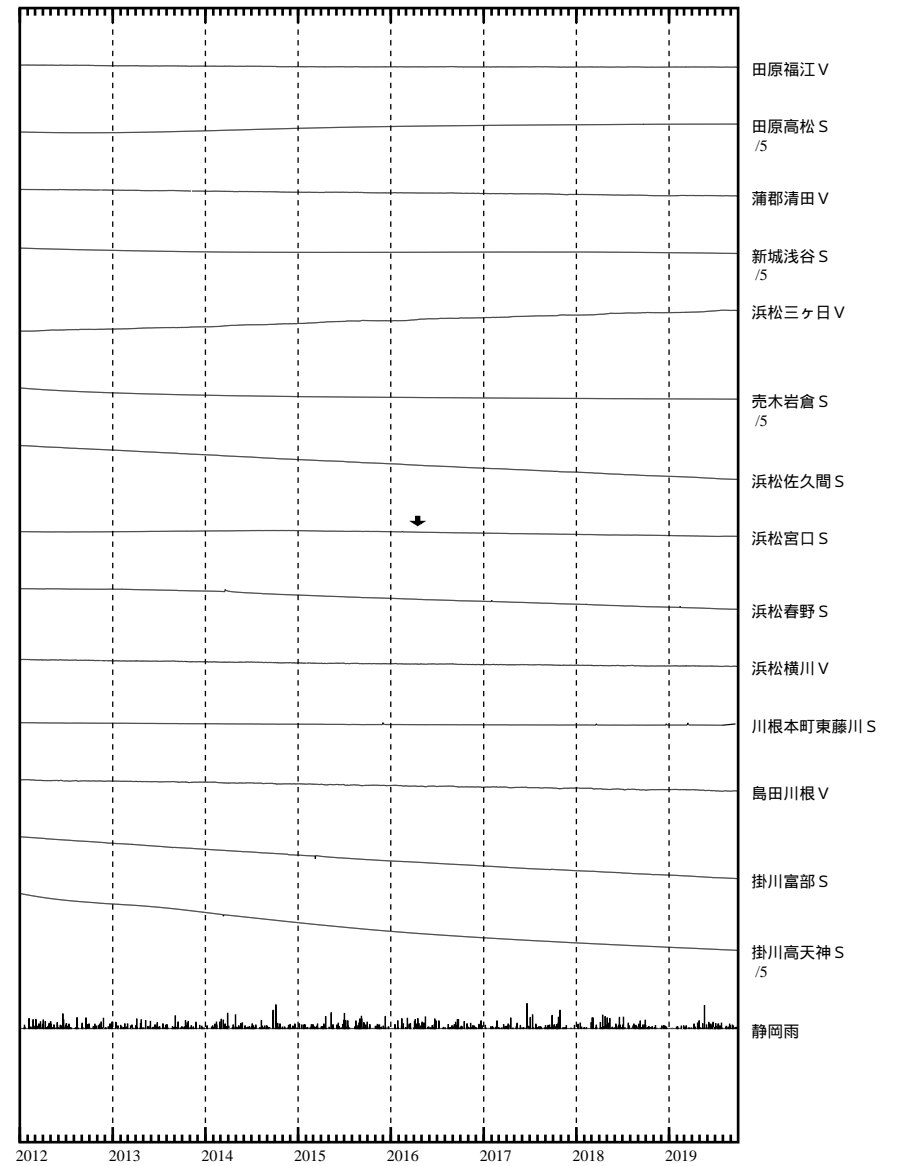
・ 気圧，潮汐，降水，地磁気（面積ひずみ）補正データ



- SSE1 : 短期的ゆっくりすべり 2019.04.06-04.07
- SSE2 : 短期的ゆっくりすべり 2019.04.22-04.23
- SSE3 : 短期的ゆっくりすべり 2019.06.11-06.15
- SSE4 : 短期的ゆっくりすべり 2019.06.25-06.28
- SSE5 : 短期的ゆっくりすべり 2019.06.29-07.03
- SSE6 : 短期的ゆっくりすべり 2019.08.03-08.06

- C : 地震に伴うステップ状の変化
- L : 局所的な変化
- S : 例年見られる変化
- M : 調整
- T : 障害

東海地域（西部） ひずみ変化 日値



面積ひずみは，地震に伴うステップ状の変化を除去して計算している。